
願わくば、私の傍に…

悦威カイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

願わくば、私の傍に…

【NZコード】

N7271U

【作者名】

悦威カイ

【あらすじ】

組織から、一人逃げ出した。

コードネーム ロゼ… 灰原哀の… 過去の恋人だった…

注意すべきところは、前書きにて予告をせていただきます。
そして常に感想お待ちしています。

file · i Memory theater (前書き)

オリキヤラを出したいと思います。
彼がちょっと困った事とに…走行不良…

月夜の晩

あの、キラーマシンは現れる
…

緋色の鮮血に身を染めて、
地のような瞳は私を捉えたまま離れない…

優しく抱きしめてくれた、

唯一、

私を抱きしめてくれた男

忘れられないまま、今を生きる…

貴方も、そうであればいい

⋮

叶わなくともいい。傍に居られればいい。

そうして私は、2度目の恋をした

⋮

変わらない愛を…

⋮

抱きしめて?

⋮

願いはきっと叶わないけど

⋮

助け出して?
連れ出して?

⋮

あの時に、拘束されたまま…
私は今を過ごす。

file · i Memory thief (後書き)

皆様、これからお願いしまッスル。（痛）
ご意見を下さった、h k k m様。誠に有難う御座いましたー！

^ (—) ^ 悅威力イ ^ (—) ^

file · 2 脱走者（前書き）

季節感。完全無視いえい。（ 本邦以外みんなやこ）

file . 2 脱走者

始まりは…

FBIからの一本の電話…

雪のような、風来坊…

・・・

貴方にはもう逢わないつもりだった…

窓の外の雪を眺めていた。

どんどん純白に染まる景色。

悪魔の呪いにかかりた彼は、血相を抱え、私を呼んだ。

運命の日

：

「なに？ 大声出して… どうかしたの？」

我ながらそっけない返事だ。

携帯を持ったまま、彼は私を廊下の方へ呼び寄せた。

「どうしたの？ 一応冷静沈着なアナタが焦るなんて…
蘭さんの彼氏でもできたの？」

「んなわけねーだろバーロー」

彼は呆れながら答えた。

・

まあ、もしそんなことが起こったのなら、相手を褒め称えてあげる…

殺されに来た勇気を…

「そんなことが起こつたら、あなたが黙つてゐるはずないものね…
ちょっと見て見たいけど。」

「そーじゃなくて、結構大事な話なんだから黙つて聞けよ。」

「FBIからでしょ、電話。」

私は言ひ。

「ああ… 1人組織から脱走したらしい…」

思わず声が出る。

「ハーデネームロゼ…」

その名前に、思わず目を見開く。

「殺し屋だそだ… って灰原！？」

彼が呼びかける。私の名前。

聞きたくなかった名前。

手が伸びてくる。

「触らないで…！」

声を張り上げた。
手を払いのける。

「触らないで…！」

悲痛の叫び。

嘘のくせに…

スキなんかじゃないくせに。私を抱かないで…
アイシテなんかないくせに…触れないで…

「灰原…！」

「哀ちゃんツツ…！？」

「灰原さん…！」

他の仲間たちも駆け寄つてくる。

息が出来ない。

地獄のような苦しみが襲いかかる…
まるで生き地獄だ…死ぬほど苦しいのに死ねない…

息が詰まつて…

「灰ツ…！…！」

気が遠くなる

…

file・2 脱走者（後書き）

哀ちゃんは過呼吸で倒れました。
実は私も過呼吸持ちなんですが…あれかなり苦しいです。
体内の二酸化炭素が足りないことで起こるストレスから来る物らし
いんですが…

最近は（つてかここ一年）全然平氣です。
只でも、怒ると苦しくなる時がたまにあります。
あんまり怒らなくなつたんですがね、たまに…

不快に思つてしまつたら誠にすみませんでした。

それとキャラ崩壊が酷くなつたです…すみません…

file · 3 告白（前書き）

保健室ですか～！～（えりあつた？！）

「ん…」

消毒液の香りが鼻につく。
白い壁、硬いベッド…暖かい風。

() () ()

保健室だ…

重い体をゆっくり起こす。

「氣いついたか?」

「…ええ。私、運ばれたみたいね…」

本を読みながら呼びかける彼と、ベットから起き上がる自分。

「さつきまで、アイツらもいたんだけどな。」

彼はふつと笑う。

「追い出すの大変だつたんだぜ? 授業受けないでお前に付いてるつて言つてよ。」

その言葉に、私も笑う。

焦らせる唇と焦る彼…見たかったかも。

「あなたは授業。」

「見りや分かんだろ?」

「人の事言えないじやない?」

「俺は一回受けたもん。授業。流石に痛い。」

クスッと笑つたら、「笑つなッ」と彼からツツコミが入った。

「驚いたでしょ?」

「え?」

「突然倒れて。」

突然出された私の言葉に、一つ間を置き、彼は頷いた。

「口ゼは…知り合いなのか?」

「違つわ。」

彼の言葉に即答する。

「昔の…」

重い口を開く。喉が渇いてる気がした。掠れた声。

「恋人よ……」

辛い。記憶。

忘れない。想い。

でも…

あの温もりは…忘れたくない…

「出逢いわね…こんな雪の降る日だったの…」

窓の外を見る。

「別れも…そう。突然現れて、突然いなくなつた…野良猫みたいな奴だったの…」

彼女の口から告げられた、ラブストーリー
悲哀

哀しく、切ない…

でも、この真実が本当に解き明かされるのは…もっと先の事

…

file・3 白由（後書き）

ありがとうございます！！皆様！！

アクセス解析を覗いて見たところ、思ったよりも多くてびっくりしました！！

（よくて2、3人と思つてました。）

これからもよろしくお願いします！！

感想評価等、お待ちしております！！

『彼は世界的凶悪犯』

灰原の声が何度も流れる。

『記憶泥棒』

【検索】

「Memory thief…聞いたこと、あるでしょ?」

この俺には、突きつけられた真実が、重かつたかもしだい。」

「どうしたの? ナン君?」

蘭の声で、俺の思考はシャットアウトする。

「あ、ゴメン。何?」

オレの返事に苦笑いして、続ける。

「明日ね、依頼主が来るんだけど…お父さんが逃げ出せないよ」
監視してくれない?」「

(逃げ出すって…なんつー探偵だよ)

俺はハハツと笑う。

「んじゃ あさ明日、少年探偵団連れて来てもいい?」
アイシング

「え?」

「おじさんのお仕事ぶりを見て見たいって言つてたんだ。」

俺はニッコリ笑う。

(この前は散々だったからな…)と内心苦笑いしながら…

「うん。分かった。ヨロシクねコナン君」

「うん。」

もつ載れた。名前

あと何度も付く繰り返しのだろう…?

答の無い、自問自答が続く

⋮

file . 4 瞳(後書き)

感想、評価お待ちしております！（ポイントも～）

オロ？地震だあああああーーー！

（現在AM10時11分）

file . 5 薔薇

雪が静かに落ちる。

季節外れの紅い薔薇。今日衝動に買つてしまつた。

不揃いに並べられているような、真紅の花弁。
その美しさに似合わない、鋭い棘は指を貫く。

伝う鮮血が、憎らしげほど紅い。

あれは…別れ？

あの男は、恋人だったの…？

(違つ…)

忘れない…？

(嫌。)

あの温もりに閉じ込められて…

綺麗な指が、頬を撫でる…

せめて夢ならば…ラクになれるのに…

出来るものなら... もう一度...

逢いたいなんて想つ事... 無二の二...

触れて。

抱きしめて。

キスをして...

それより...

傍に居たい

...

傍に居て

...?

Iのまゝ...

私はまた... 溢れ出す悲しみを抱きしめて... 眠る...

「H」

...

貴方の名前を…呴きながら…

file . 5 薔薇（後書き）

個人的に切なめの話にしたかったのですが…

自分、文章力無さ過ぎいいいい！……！……おぞれ……！

感想評価お待ちしますううう！！

でわ次回ーまたお会いしたいです！！

file · 6 微笑（前書き）

ミステリーってやつぱっこいですねえ

file . 6 微笑

「ジン…

冷たい足音が響く…

瞳孔が開き… 变な汗が湧き上がる…

奴ラガ来タ…？

「ありがとうございますーー！」

光彦が礼を言う。それに続いて残りの二人も。

「おひおひ…」

小五郎は切なそうに顎を搔いた。

(一) こつらが来なきやあ……俺は今頃麻雀(いぐうへーーー)

などと思いながら…

「今日はどんな依頼なんですか?」
「自分の姉を探してほしいんだとよ。」
「へえ……そなうなんですか……」
「どんな依頼主だらうねーーー。」
「美人だつたらど〜しょ。」

そんな雑談が始まる。哀はコナンに声をかけた。

「それで? 依頼主はいつ来るの?」
「あ……もうそろそろだとと思つんだけど……」

やつ「コナンが言つたといふで…

《ドクンッシ》

心拍が急に上がった。

背筋が寒くなる…思わずコナンの腕を掴んだ。

「灰原…?」

哀のその様子を見て、コナンは愛を自分の後ろに回す。

そして、時計型麻酔銃を起動させた。

コジン

足音が響く

(来た ……)

グッと手の力を強くした。

瞳孔が開き、肩が自然に震える。

(ヤツラガ……)

「ナンは扉をキッと睨んだ

…

ゆつくりと扉が開き…現れたのは…

「子供……？」

コナンが漏らす。

そして後ろへ振り替える。先ほどまでの強い力は消え、哀は…

「気配が…消えた…」

「え…?」

その言葉に、驚くしかなかつた……。

file . 6 微笑（後書き）

一話だけですがすみません…

沢山の「アクセス」…ありがとうございます…！ 悅威の心の励みです！！

千行つたぜえええ…！…こやつはあああ…！（ 壊れ氣味）

「これからもよろしくお願ひします…！」。

「姉えそんとやうの写真は？」

「あ、これです~」

その子……こや渚は『眞を渡した。

「……」

映る姿は…

「ベルモント……?」

哀は小さく囁いた。

「じつこれ、クリス=ヴィンヤードじゃねえか！？」

「違いますよ~」

小五郎のそばに渚は立つ。

確かによく見るとひがう……皿の色と…

「私の実の姉、静。今は二十歳力ナ？」

ニヤリと、口元に笑みを浮かべた。

小五郎は、しゃーねーとため息を一つ吐き出した。

「車借りて、探しに行くか……姉さんの居そうなどいわけ？」

「カラオケとか…今時の女子高生が好みそなとこ？」

「蘭。ナビしる。」

「うん。」

車を借りて、出発した。

file · 8 出来事

「やつぱり。」

小五郎がそう漏らしたのは、言ひまでもない。

探していたはずの女性は、無くなっていた。
刺殺。殺人の可能性は高い。

「やつぱりね……」

渚もそう漏らした。

・・・

「消されてつと思つた。」

聞こえるか聞こえないかギリギリの声で。囁く。

「指紋とかは、」

小五郎が言った。

その言葉にコナンが耳を傾けたといひで、渚が…

「首の頸動脈を一突き。しかも綺麗に…犯人の職業は特殊、と思うよ。」

そつ告げる。周りはその言葉に驚いた。

「ここまで詳しいこと…でもこんなに田立つていたらプロではない。部屋は荒れているし」

カラオケの一つの個室。電気はついていない。窓があり、明るい。しかも開いている。

「窓からは逃げてない。足の位置がおかしいし…」

入口に倒れる女性の死体を見つめながら、渚は告げる。

「まだ」元気と黙つて。

そつ言つてほほ笑む…

隠されていた、紅いよつな瞳…

少し…見えた。

一つの事件…

file . 8 出来事（後書き）

カイ「ナギ……姉貴が殺されたのに素面つて～^{シラフ}」

渚 「ポケモン見にいきてえなあ～」

哀 「噛み合つてないわね、話。」

蘭 「更新遅くてすみません……もっと早くやれるよう頑張ります
！！b ソ悦威」

カイ「感想、評価。お待ちしてます……こつぱこトセー……」

…アドバイスを…

file · 9 幻(前書き)

いやあ～出かけておもつた～暑いが、です。

file . 9 幻

「あれれえ～？？」

その、コナンの言葉に探偵団は、不満を持った。

「そんなんだから、甘くみられるんですよ……。
「何に媚びてんだよ……。」

「可愛いんだけどね……」

そんな言葉が伝えられた。

コナンは内心（前にも言われなかつたっけ？）とか思つてしたりする。

「ワンパターンね……」

哀も言ひ出す。

はあと吐いたため息に、渚は笑つた。

「?.なんだよ。」

そつ、元太が言つと渚は「仲イイなあと思つてね。」と微笑んだ。

今のところ。コナンには犯人は分かつた。とりあえずオッチャンを眠らせればいいんだが……

どうも、この渚といづ子に見張られてるよつた気がして……

「大丈夫よ。」

哀がそうシャットダウンする。

「早く帰りたいわ、ここから。」

そう言われて、またコナンはため息を吐いた。

今回の事件…

探偵事務所に依頼された、人探し。

依頼人は月澤渚… 性別は… 一応不明。

「私」と言つからには女の子だとは思うんだが… まあともかく。「姉を探し」が今回の依頼。

只しかし、その姉と称される女性は… 何者かの手によつて殺害されていた…

死因は、頸動脈を切られたことによる、失血死と判明。

その被害者の妹と言つ渚… どうも似ていない。腹違いと考えたとしても、

姉が殺されたというのに、この妙な落ち着きっぷりは…

被害者の名は遠野静苗^{とおのしづか}字が違うのは、両親が離婚したからと言つが…

高木刑事によると… 彼女の親は離婚などしていなく、一人娘だといふ。

月澤渚の事も調べて貰つたが、戸籍はない。

何者なんだ…？コイツ…

「犯人は、お前だ！！！」

そう言って、一人の医師が…名指された。

お決まりの台詞…

「つまらぬあああつ……」

その男は拳銃を取り出す。そして…

「ちよつ……離しなさい……」

渚が捕まつた。その犯人の行動に佐藤刑事が声を荒立てる。
そして…

「せつ……佐藤さん……！」

一瞬の事だつた。黒い車が現場を囲んだ。

「なッツツ……！」

目を見開くコナン。

犯人の…仲間なのだろうか…暴力団組員が、次々と侵入していく。

カツツ……！

杖が鳴り響いた。組長らしき男が前に立つ。

「や！」をどけ、^{イス}警察ども…

低く…言い放つ…

すつとその場を引く佐藤。首も回る。

「助けに来てくれたんですね……！」

犯人の男が嬉しそうに言った。しかし…

file · 10 紋色（後書き）

皆様、このごろすこしとぼしているやうな事に^（—）^

「灰原…落ち着いて聞けよ…」

少年は口を開き言つた

「たぶんアイツは…口ゼだ…」

胸の奥で暴れだしたのは…何

…?

「えつ……？」

すつと、渚が手を真上に挙げた。

「ぐあひつーーー！」

男の拳銃を握つている手に噛みつく。銃が落ちた。そして…
男の視界に影が落ちた。

「グつーーーーーーー！」

男の鼻に、渚の踵が墜ちる。

そして渚は、銃口を向けた。

「ちょ…お嬢ちゃん…それ本物だから、返つ…
「賭けをしようか…？」

男の言葉を遮り言つた。

「生きるか死ぬか…賭けてみない？」

浮かべた薄笑い。

隠されていた紅い瞳が…妖しく輝いた…

・
彼に纏う…威圧感。男は…失禁した。

一同は驚く。

「なんだあ……つまんねえの。」

渚はそう漏りし、振り返った。

「爺さん……返すよ~？」

持っていた拳銃を投げる。

「ソレ、宴会かなんかで使うんじゃないのか？」

・

「おおお。よく分かったな坊主

その様子を見て、佐藤刑事が確認に入った。

「本当だ……軽い……」

本物を持ったことがないと分からぬ。その位の違い。
微かにおかしい……

「灰原……」

「ナンンが言った。

「アイツ……ロゼかもしない……」

微かかな違和感……

胸が鳴る…

「じゅあなぜ…」

哀は言つた。

「あの強い組織の氣配…なぜ消えたの…？」

…アノ時ト…同ジ…

《シホ》

file.11 ロゼ(後書き)

次の次あたりに過去編を…

『シホ
...』

やめて。

『オマエダケダコ...』

言わないで...

『好きになつたのは...』

哀が叫ぶ。そして：

フツ

意識が途切れた。

ドサリ

彼女はその場に倒れこんだ。

• • • • • • • • • • • •

「灰原ツツ！？」

「哀ちゃん！…」 「灰原さん！…」 「灰原！…！」

見合が駆け寄る。.

「シホ」

哀しく…彼女の**真実**^{ナマエ}を呴いた。

「ゴメン…」

その言葉を…コナンは聞き逃さなかつた。

氣を失つた。哀。

過去の…記憶…を夢て^みいた。

彼女はすぐ、病院へ運ばれた。

file · 12 名前（後書き）

…やっぱり。次の次から過去編です。

file .13 真実

「お前は……エだな……？ エヤ……」

この問いは、確信に近い。

少女は、眠っていた。ただ静かに……

「渚……！」

突然名を呼ばれた。

「ジョディイ…」

かつて、帝丹高校で教師をした彼女、実はFBIの刑事の一人だった。

そんなジョディは息を大きく吸い込み、言つた。

「I am in such a place why!?」
(どうしてこんな所にいるの!?)

「I'm sorry.」

(ダメー...)

「If you do it, and disguise go
est to the lack and says how ma
ny times,
do you understand it?」

(変装くらいしなさいと何度も言つたらわかるの?!)

息をいっぱい吸い込み、ジョディは続ける。

「I become frantic, and does th
e organization look for you...?
(組織は血眼になつてまであなたを探しているのよ...?)

「Cut off evil...」

(悪かつたつて...)

苦笑いしながら陳謝する渚。

「あれ? ジョーディ先生?」

院内での一人の口論に、蘭が口を挟んだ。

「え? あれ?」

ジョーディは驚く。

「It is sherry that I came to meet...」

(俺はショリーに会いに来たから....)

「え...?」

渚が言った。

そしてコナンが吐き出すかのよつて言つた:

「Are you rose?」

(おまえはロゼだな)

その問いは、蘭には理解できなかつた。

「Oh... It is so...」

(ああ…そうだよ…?)

渚は言った。少し笑う。

「And... You are Yue... Rose...」

(そして…お前はユエだな…ローズ…)

確信は… 真実に変わった。

「 It is a correct answer.
on the name wonderfully
(正解だよ。お見事、名探偵！)」
... I spy

file.13 真実（後書き）

英語だらけですいませんでした！！私も気持ち悪つ…（酔つた）

間違いなどがあったら、ご指摘お待ちします！！

file .14 Ti Amo? (前書き)

過去編へ行きます。志保さんは16歳位

EXILEさんの「Ti Amo」がベースです。いい曲ですよ。
大好きです。この歌。

あの運命の日

⋮

貴方は哀しい瞳をしていた

⋮

「それをずっと覚えてる。」

真っ白い雪が、景色を染め上げる。

鮮やかに…純白に染まる景色

「Good morning is older sister.」

隣に住む老婆が言った。

「Good morning. It is great snow.」

そう言って老婆は笑つ。

私はその笑顔を見て、背後からかけて行く子供たちを見て行つた。

「The snow shoveling is great. A grandchild looks good.」

老婆はまた、クシャリと笑つた。

老婆の孫が走り寄る。

「A grandma is serious!」

「What, I am noisy. A person is dead!—!」

「え…？」

思わず耳疑つた。

案内されていつた路地裏に…

貴方は倒れていた。

file .14 Ti Amo? (後書き)

英語だらけ第一弾。おええ……頭痛い……。

感想評価、お待ちしています。

file · i5 Ti Amo? (前書き)

小さな豆知識。

イギリスとアメリカでは、同じ英語でもかなり違つてしまっていますよ。

file .15 Ti Amo?

「Are you a Chinese?」

(あなたは中国人?)

「混血^{ハーフ}…かな? 日本語でいいよ。」

「それとも、イギリス英語のがいい?」

その紅い瞳^瞳が…不思議と私を捉えたまま、離さない…

「驚いた。よく気が付いたわね……私が混血ハーフだつて。」

「瞳が、灰色っぽいしね……東洋顔なのに。あと髪色かな？」

先程倒れていた男は、運良く生きていた。

助け出され、私の家へと運ばれた。

近所の老女は、散々手をかけた後、シチューを置いて去って行った。

……人間なら普通、あんな雪に埋まっていたら凍死するだろうに……

「……俺は人間だよ。一応。」

彼は微笑んだ。

「胡散臭そうな顔してたら普通氣づくから。」

「私そんな顔してないわ。」

「素直じゃないねえ……」

そんな彼の前に、先程渡されたシチューを置いた。

「さつきのお婆さんから、」

「お~うまそう。いただきます。」

おいしそうにシチューを頬張る彼。

「今度アンタの料理も食わせてよ。」

「今度つて…また来る気?」

別に構わないけど、私はアンタじやない。
志保よ。富野志保。アナタは?」

「あ、俺?」

そう言つて少し彼は黙つてゐる。

「名前、決めていいよ?」

「は?何、新手の商売?」

「違くて…俺名前ないのよ。」

そう言つて苦笑い。

「中国つてさ、一人つ子対策とかつてやつてたじやん?」

「ええ…」

「俺闇つ子つて奴なんだよね…いわゆる。」

「戸籍さえない…つて事?」

「うん。資金的に無理が出てきちゃ…」

相変わらずシチューを食べながら言つた。

「売られたんだ。ある組織に…」

「え…」

「身軽さを買われたのかな?」

彼はそう言つて微笑んだ。

「コードネームならあるかな?宜しく、ショリー
天才殺し屋、ロゼです。」

「自分で天才って言うなんて…ナルシストなのね、ヨロシク、ロゼ…天才科学者、シェリーよ。」

そんなくだらない、自己紹介をして、笑いあつた。

始まりの時

⋮

「あなたがロゼなら…私はユエって呼ぶわ…」

ユエは中国語で月。

出逢った日の朝は、晴天で、月が見えた。

この名前を上げたのは…私…

file .15 Ti Amo? (後書き)

今回始めです。スマート...>（—）<

あと一話ほど。お付き合いでお願ひします！――

file . 16 Ti Amo ?

ロゼ...いやコトコト

右腕に絡まるよつこ薔薇の蔓があった。

背が高くて、長髪タレ目で

そして向よつ

右田の...緋色の瞳

不思議な...緋色チノイロ

バラの紅、血の紅
身も心も、真紅に染まる

その言葉にため息を吐く。

「矛盾してないよ。シャーレで生まれた後、
何処かの家族に買われたんだ。」
「それで売つてたら犯罪じゃない。」
「…あ、ホントだ。」

「俺はシャーレで生まれたんだ。」
「はあ？ 矛盾してるわよ。」

母親について聞いた。

「……うへ唄つか……いつまでいるで居るのよ。」

もう既に、夜。外はすでに陽が落ち、雪がまた降り始めた。

「うへかさ……」

ユウは笑顔で囁いた。

「ユウ庄まわさせてくれなー?」

「まー」

普通。やつへる。

file · 16 Ti Amo ? (後書き)

すみません。あと一話…>（――）<

file.17 Ti Amo? (前書き)

哀ちゃん(つて言つか志保ちゃん)は
依存するタイプな気がするんですね…

個人的に…

file.17 Ti Amo ?

「…料理苦手でしょ。」

その言葉に反論できなかつた。

「火い、噴いてるよ。」
「うあつ」

「水跳ねるよ～」

「熱つ！！！」

キッキンで…

私の苦手な事がバレた。

「ほりかして？やつた上げるから。」

「……」

キッキンにある椅子に座る。

「上手いわね。」

「慣れてるからねえ……」

軽快な包丁の音が響く。

「… そう言えば志保さんは、一人暮らし長くなかった？」

「悪かつたわね！！いつも出来合の物で済ませてるわよーーー！」

私の言葉に笑う。私は釣られて苦笑いした。

・・・・・

「美味しい？」

「…うん。」

作ったのはパスタ。

ソースはさつときのシチューに手を加えたもの。

「でも冷蔵庫、本と何もないねえ」

ゴンの言葉に

「五月蠅いわよ。」

そつ小ちへ返した。

「料理できないとモテないよ?」

「見た目だけで判断する野郎共なら沢山いるわ。バカ」

「あ

」

ゴンは続けた。

「ジン・・・とか?」

その名前に目を見開く。

「かつ…」

「か?」

「関係ないわよ…あんな奴…只のドバカじゃない…」

そつ叫んだ。

ゴンはしばらくあっけに取られてから、

「顔真っ赤。」

と指摘した。

「『』馳走様！――！」

皿を置いて、勢いよく立ちあがつたら
テーブルに膝をぶつけた。

「い　　？……」

「大丈夫か？」

「笑つてんじやないわよ――！」

「ゴメン。ほら、どこ痛いの？」

右手を掴む。

「好きなの？ジンの事。」

私の膝を見ながら言った。

「無理だよ？肉体的にも、精神的にも……」

「……知ってるわよ……」

そう小さく返す。

「だから諦めようと……忘れようと……」

何かが込み上げる……れば、涙？

「……ならせ……」

眞つ直ぐな瞳。

「されどおもひる」

…

捕
ら
わ
れ
た

:

file.17 Ti Amo? (後書き)

…哀ちゃんは流され受け?

料理は教えて貰つた設定で行きます。

最近暗いニュースが多いですね…（テロとか人身売買とか…）

「世知辛い世の中だぜ」

感想評価等々、お待ちしております…!!

ロゼ=ゴン=渚

目を覚ますと、辺りは白い壁。

そして、貴方は居た。

「…ユエ…？」

流石に…整理は出来ていた。
彼は…組織から逃げて来て…

「例の薬…飲んだの？」

その問いに、頷く。

「顔が、人に見られてね…あの探偵さんは見たらしきけど、
警視庁の方で、特徴が詳しく書かれちゃってさ。

倉庫に呼び出されて、突然後ろから撃たれちゃって、燃やされた。

そう言つて、ベッドの付近にある椅子に腰を掛けた。

「なら何で、薬を飲んだの？」

「お前を見たから。」

思わず聞き返す。

「逃げ出して、見つかれないから、俺にも捜索に協力をせられたんだ。」

「その時に…？その時に私が縮んで、生きてる事を知ったの？」

「ああ……あの探偵君は……似てたしな……工藤新一……」

「それで気づいたのね……APT-X4869の効果に……」

「ああ……ほんと賭けに近かつたけどな。」

そう言い終わつた後。冷たい空気が流れた。
別れたと言つても、突然消えたに近かつた。

「何で……分かつたの……？私だつて……」

「アイリッシュ……」

「え……？」

ふと出された、どこか聞き覚えのある名前。

「飲み友達でや……酔つた勢いで言つたんだ。

『あの工藤新一は、小さくなつて生きてる。
あのショリーに似たガキも、近くにいたんだぜ。』つてさ。

「信じたの？」

「まさか。お前を見るまで信じる気はなかつたよ。」

そしてまた沈黙。

「ねえ……」

「ん？」

また私はその沈黙を破つた。

「どうして……」

長年疑問に思い続けたことをぶつけた
……

「私の前から　　「渚！――！」

その問いを、タイミングよくジョーディが遮った。

file · 18 死亡（後書き）

カイ「いわせねーよーーー！」

「…逝かせましょうか？」

カイ「すつ：スイマセンが…」
ちょっと引っ張つて頂いても宜しいでしょつか…？」

渚「お腹すいた。」

コナン「…次回だつてさ。」

「あ……」めん……

ジョーディは、二人の空気が違つ事に気がつき、とつとて謝った。

「いや……いよ。何?」

渚はそう呟づけると、ジョーディは……

「……貴方は本当に口がぜなの?」

「「はあ?」「

渚と哀は、声をそろえた。

「焼け跡から焼死体？」

「ええ…今キールからの情報が入つて…」

そうジヨーディは告げると、渚はため息を吐いた。

「あのわー、そんなのどひせ、『現場』にいたホームレスとかじや
なくて?」

「…そうなの?」

「いやわかんないけどさ。」

そのやり取りに哀は笑った。

(…変わらない…)

ちゅうと微妙に投げやつの口調が…

「?何にせにやしてんだよ。」

「しないわ。」

哀はそう言つてそっぽを向いた。

「じりんじやん。変態。」

「は?…なんであんたなんかに変態つて言われなきゃなんないのよ

!…」

「何かつてなんだよ！…まるで俺が変態みてえな言い方は……」「だつてそうじゃない！…変態！…ドジバカ！…」

「バカはねえだろバカは！…」

ざやあざやあと口喧嘩が始まる。

その様子をたまたま病室に入ってきたコナンは目撃して驚いた。

普段無表情で、子供らしくない彼女が、口喧嘩ときた。

(…笑ってる…)

大声で笑いながら、まるで無邪気な子供のよつに…

「哀ちゃんは、渚の前だとちゃんと笑うのね」

ジョディが、コナンにそつ耳打ちし、ウインクした。

「ホントだね。」

その様子を見て、コナンは安心したかのように微笑んだ。

(ちゃんと…笑えんだな…)

そして一人は病室を後にした。

file . 20 life (後書き)

…まあ、笑わないですかね、哀しみやん。

後々、諸のイメージ絵をPiXivにでも投稿したいと思います。

感想評価等々お待ちしております！！

コナン視点

…なぜか、共に旅行へ行くことになった。

好きだな旅行ネタ。

「問題です！！」

光彦が言った。

「これからどこへ行くのでしょーか！？」

「大阪～！！！」

そう、なぜか服部に呼ばれ、大阪へ行くことになった。

「あら、探偵さんはあんまり乗り気じゃないのね。」

「嫌な予感しかしないからナ。」

吐き出すかのように言った。

メンバーは

俺、博士、オツチャン、蘭、園子、歩美、光彦、元太、灰原。

そして…

「寝てんの？それ…」

灰原の膝の上に乗る、黒い頭を指した。

「寝てるわけないじゃない」

灰原がため息交じりに、渚の頭を小突いた。

「いいじゃないか、お前の膝気持ちいいし」

「あんた、それオッサン発言だから。」

そう。なぜか渚も行くことになった。

その後、FBIの計らいで、どこかの国の王子なんだ。
と適当な理由をつけて、戸籍はなくても、極秘でムリヤリ転入させた。

その後は、いつもの如く探偵団の誘われ、渚は面白がって加入した。

「そういうば、あの写真はなんだつたんだ？」

ふと、疑問をぶつけた。

「え？」

「事件に持ってきた、あの写真の人物と、お前の関係だよ

「あー…」

思い出したよう

「あれ、キャバ嬢だったの。」

「は？」

そう言った。

「『あの方』お気に入りのね？」

「…相當ベルモットを気に入ってるんだな」

そう言つと、らしくいね。と渚は悪戯に微笑んだ。

「…でか、お前何で来たんだ？」

俺は言ひ。

「え、だつて見て見たいじやん、西の名探偵」

当たり前じやんと言つような顔をして返された。
つて言つた…何で服部は俺たちの事呼んだんだ？

file .21 突然の呼び出し（後書き）

イメージ — 悅威カイ 「pixiv」 http://pixiv.net
1/i/20861447

諸君のイメージです。

興味のある方はどうぞ。

「初めまして！…月澤渚です！…」

渚^{コホ}は、持ち前の社交性で早速、大阪カツプルと意気投合した。

・・・・・

服部家、廊下。

食事を終え、服部を引っ張つてきたコナン。

「記憶泥棒つて…あの記憶を無くしちゃう奴やろ?」

「そうだ。」

「…ウチの親父、めっちゃ意気投合しどるだ」

茶の間を覗くと、少し頬を赤らめ、

お酒により上機嫌になつた刑事の一人がいた。

「めっちゃ敵対関係やで。えらい『記憶泥棒』嫌つとつた一人やし

「…あいつFBIに拾われて、仲よくしてるくらいだしな。」

ははつと、その大阪府警本部長にお酌する渚を見て笑つた。

「それ、仲間売つたつて事か?」

服部は、さうコナンに聞いたが

「いや…」

この少女の言葉で、返された。

「あいつ。幼い頃から組織に育てられて、
恩とかあるみたいだしね。私もだけど…」

同じ組織に居た少女。灰原哀は言った。

「義理とか、人情に厚い奴なのよ、結構。

でも凄い情報とか入るわよ口を割らせたら、

『あの方』とだって会った事あるだろ?しね

淡々と告げた。

「ホンマか?それ。」

「さあ?多分よた・ぶ・ん。でもアイツは優秀な兵器だつたしね…」

「『兵器?』」

哀のその言葉に、「ナン」と服部が食い掛かつた。

「…『あの方』…いや組織は…」

強い瞳。

でもビートなく寂しそうな…

組織の人間の目…

重い口を、哀は開いた。

「ゲームの駒としか思っていないのよ。私たちの事…分かる？」この意味…私たちは、手札の一つなの。」

日の光を当たり、育つてきた者にとつては、ありえない世界。

絶対に…足を踏み入れてはいけない世界。

もう既に、後戻りは出来ないよつなどここに…

少年達は立っていた。

「…」

侍は、その場から一步も動けなかつた。

・・・

「渚！アンタ何？その傷！！」

風呂から上がり、戻ってきた渚に向かって、園子が言つた。
周りの一回は、言葉を無くす。

それは、黒いタンクトップを着た、渚の躰に在つた。

首筋から、墮ちる傷痕。

「あ、これ？」

渚は答えた。

「不注意で車に跳ねられちゃつた時の傷です。」

その答えに服部は、

（いや、絶対何かで斬られた痕や。）

そう突つこだ。

子供の体には似つかわしくない、

首筋から、墮ちる傷。

きっと胸部まで届いていたんだろう。

（だから……首まで隠れる服着とったんか？）

分かる者は皆、その傷が《怪しい》と感じていた。

なぜか、悲しそうに渚から田を反り返した。
それに気がつくのは、居なかつた…と思つ。

悦威「渚は動かしやすいね。」

渚「お前によく似た性格らしいしね」

悦威「…そういう風だと思つ。」

「ちょい、来なさい。」

怪しだ、平次の父親 服部平蔵は、渚を呼びだした。

服部と共に。
へいじ

・・・・・

「これは、刀傷やな？」

そう、平蔵は告げた。

「ん~僕も覚えてないんですね、あんまり……」

渚はそう答える。

「ほな、静華呼んでくるさかい、平次、ちやんと見てひよ
「俺はそのために呼ばれたんかい！…！」

平蔵は立ち上がり、その場を去った。

「で？」

服部は言つた。

「ほなま本當所は？」

「ジンに斬られた。」

渚は即答。

「…なんや口ゼさん、えろいあつさつ答えるんやなア」

「隠すほどの事でもないけどね。キリは俺の正体知つてるから話したの」

「ほお。まあしらん人がそれ聞いたらおかしい話やもんな。
「よく分かつてんじやん。」

そう言つて渚は、座らされていた椅子から飛び降り、あるものを指した。

「これ、本物?」

日本刀だ。

「え、まあそいうらしいけど……」

「日本人の感覺つてよく分かんねえな、俺も欲しいけどさ。」

「うめん。俺アお前の感覺もようつわからんわ。最後の一言のせいだ

ハハツと苦笑いする服部。

(あの、小っさい姉ちゃんみたいに、
ガキらしくはないようには見えんけど…
話してみるとよお分からん奴やなア…なに考えてんのか全然分から
へん。)

「んで…探偵さんは幼馴染の子が好きみたいだね。」

渚は、刀を見つめたまま、そう告げる。

「ああ、言い間違えた。あの探偵さんの周りには…かな?」

にやり、不敵に微笑んだ。

「え…?」

よく状況が理解できない。

「和葉ちゃんって娘の話。」

「あ、アイツは只の幼馴染や」

和葉の名前が出て、やっと状況を理解した。

「…ホントに？」

そう聞き返す渚。今度は真っ直ぐ服部を見る。

「あ、おう…」

やつ田を反らす。

「ガキくせ」

「何やと…」

渚が答えた。

「ガキにガキ言われたないわ…！」

そう言って渚の方へ一歩、歩みだしたところ

シユツ

そんな音を立てて、飾られていた日本刀が、服部の首ギリギリで止
まった。

あと、もう一一二三程度の距離で止まる…

「あのね、人ってのはヤル事やってから、やっと大人になるの。
それと、君よりいくつか年上だから、俺。言葉使いにに気い付けて

？」

そして、ゆうべつと、刀が元の場所に戻された。

「遅なつたな、渚君。」

その時、平蔵が静華を引き連れて帰ってきた。

「……ん？ 平次、なに変な顔しとるん？」

静華は言つ。

「いや……なんでもない……」

そう答えた服部。

(あの刀えらい重いのに、何で片手であんな軽々持ち上げられたんや？！)

不覚にも、少年は一步もその場から動けなかつた。

file . 24 Mysterious? (後書き)

渚 「銃撃戦と接近戦が得意です」

悦威 「口喧嘩が好きです」

渚 「痴話喧嘩はイラッヒ来ます。」

哀 「だんだん主張からずれています。」

コナン 「…感想評価等々、お待ちしています。」

file .25 快晴の空（前書き）

ナギの前だと、さわやかな哀愁やん。

「それじゃあ、男子と女子に分かれて。」

そつ快晴の空の下、似合わず爽やかに告げる彼女を見て、

「お前、そんなに嬉しそうに言つことないだろ？ ってか恐いぞ」

一同の気持ちを代弁した彼に、皆は心の中で頷いた。

「俺女子軍がいい。この探偵さん達と居たら絶対事件が起こる。」
「男子軍、女子軍と別れ、大阪観光することになった一同
ワケ 理由は…

「俺女子軍がいい。この探偵さん達と居たら絶対事件が起こる。」

「いや、来ないでくれない？あんた両刀なんでしょう？良かつたねハ
ーレムよ」

「むさくてヤダ、樂しくないからヤダ」

「別にアンタが楽しめなかろうと、私には関係ないわ。」

こんなわけ、

女子一同としては（一部除く）

「今日ぐらーには事件に遭遇したくない」「らしい。
あと、振り回されたくない」という

まあ、ともかく…

観光は始まった。

file . 25 快晴の空（後書き）

哀 「私達は当分出番無いの」

渚 「嬉しいか？そんなに嬉しいのか？？」

悦威 「…嬉しいと思うよ。」

たくさんの「」アクセス! ! いつもありがとうございます! !

「…疲れた。平次オンブ。」

「なんやねん。しゃーないな…」

そんな行動を横目で見つつ…

「おまえ服部なんだかんだ言つて面倒見いいよな」

苦笑いしながらもううつ告げた、コナン少年であった。

「たこ焼き食うか？」

「食べる……」

「食べ。」

「俺も。」

平次の間に、元太、渚、コナンと続いた。

「光彦？」

「ナンセンセ語つと。」

「じゃあお言葉にあまえて……」

と予供らしくない発言を光彦はした。

おつかれさんと、平次の父親は不在。（博士は安全（～）のために女子軍ぐ）

まあ、そこでもう既に嫌な予感のする方はいるだろ？

あと、後付だが今は近所のお祭りの真っ最中。
知り合いとかに会つちゃつたりするわけで…

「よお！…はつと…り？！」

「なんやねん。来とつたんかお前ひも」

同級生に会つちゃつたりするわけで…
クラスメイト

そんでもって、探偵稼業とかでそこそこの顔が売れてる人物であるからして…

「服部君いつの間に子供にされたんか？！」

そう騒ぐ女子生徒が居たりするわけで…

「ちやうわー！東京の方の知り合いの子供やーー！」

「うつそー！ちょっと、高橋ーー！」

「佐藤ーー！大変やーー！大変ーー！服部がガキにされたでーー！」

大体そういう輩は団体さんだつたりするわけで、あつという間に人だかり。

「俺のガキとちやう言ひとるやうーーー！」

そんな平次の叫びは虚しくじだました。
まあそんなのも気にせず…

「平次ーー！アンタも来とつたんか…こーー！」

幼馴染かずは一行は来ちゃつたわけで…

「かつ和葉お前なんちゅうタイミングで…」

「あ、お母んーー！待つてたでえーーー！」

まあ、中身が大人の悪がきは…

「なつナギーー！」

「やつぱりーーー！お母ちゃんの母親和葉はやつたんーーー！」

「何でアンタらいるのん?」

「幼馴染カツプルやん流石!…!」

そう同級生クラスメイトが言つたところで…

「え…えつえつ!…?」

鈍感かずは少女はやつと状況を理解し…

「そんなわけあるかいなあ!…!…!」

頬を紅潮させ叫ぶ和葉に

「そんなの脂氣しそうづいてるよ」

渚はちょっと飽きたらしく…
冷たくそう吐いた後。

「平次かき氷食いたい」

と、次の行に移つていたりする。

「…何味や。」

平次はもう一刻も早くその場を去りたそうであった。

「
莓味
」

超甘党な諸少年はそう答えた。

悦威「…事件起りやなくていいかなあ」

渚 「そうして。」

哀 「私しばらく出番なかつたんじやないの？」

悦威「アドリブです」

感想評価等々、お待りしております！（もちろんポイントも）

file .27

莓味の休日？（前書き）

光彦君の疑問

「莓味」

「…甘いぞ」

「いいのもつと甘くてもイイ」

そんな超絶甘党発言をした渚少年に対し…

「？光彦食わねーのかあ？」

「あ、食べますよ。元太君にはあげません！」

まあ、哀ちゃんに片想い中である渚君に敵対心を燃やしていたつておかしくはないのであります。

「合つ変わらず甘党ね、あんた

「食う？美味しいよ。」

「ちょーだい」

そのやり取り

「かつ…間接キス…！」

光彦は言つ。

それは自然に行つた事であり、

実際の「真実の姿」^{ホント}の時に肉体関係を持つていた一人にとっては別に嫌とかそう感じる訳でもないため…

「あーあ・・・」

フォロー入れとこうかなあとコナンは考え込むが

「なに、妬いてんの?」

哀を引き寄せ、ニヤリと笑う渚。

ここら辺で教えておきましょ。彼の嫌いなもの。

「へいわ平和」

好きなものは「糖分」

それと何より...

「そ、そんなんじゃないです!!

は、灰原さんが嫌がってるでしょう!だからつ――..」

「いや、抵抗してないよ、哀」

屈辱とかまあ...

そつ言つのを受けて悔しがるのを見るのが好き。

優越感とかそんなのじゃなく..

只試行錯誤するん開けど空回りしてるのを見るのが大好きな

「頑張ってね?射的に行こうぜ、哀」

「え、あ、ちょっとー?..」

アリバードアリマシタトカ

私も光彦君をいじるのが大好きです。

シユーラバ！修羅場が来ました？

「今時の子はマセてるだーー！」

それはそれは楽しそうに語る渚君

哀はため息と、わずかな笑みがこぼれた。

その意味は、彼の笑顔が好きだから。

その笑顔があれば、どんなに小さなことでも笑える。

「射的やる？」

その渚の問いに

「ええ」

それは嬉しそうに

「やつまじょーひー！」

答えられるのであった。

彼女の殻を破る事の出来た、渚の技。

・・・・・

「さて、服部。」

「ああ、始まつちまつたな工藤。」

「どうしようか」

「どうするんや？」

「アイツは射的をしていると思つが」

「探しに行くか？」

「正直いかない方がいいとも思つ

「何で？」

「光彦に探させるのが適作だろ？、俺が探しても意味はない」

「確かに。でもアイツ、タチ悪いなア」

「ああ…」

階段中の探偵は言った。

「あれは心底楽しんでいる顔だった」

実際に、ホラー。まさにホラー！

「服部さん」

そんな会話をしていたら光彦が平次に声をかけた。

「なんや?」

「ちよつと」

まあ、探偵団はマセガキの集団。

「灰原さん探してきます」

まだ弱いが鬼気迫るもののがアリ・・・

「行つてらつしゃい、氣い付けてなあ・・・

平次は弱弱しく送り出した

「氣イ抜けてくるわ

「同感だ。」

探偵さん達はともに、苦笑いした。

「プレゼント？」

渡されたのは、貯金箱。

「いや、いらねーから渡しちゃうだろ、お前」

「うん。」

「そこ頷いていいんかい」

まあそんな小さな漫才を終え、

「光彦に会わなかつたか？お前ら」

「ナンは聞く。」

「光彦？会つた？哀」

「え…会わなかつたわよ」

二人は言つ。

「なんか嫌な予感がするんやけど

平次は言った。

射的をして、適当にふらついて帰ってきた渚と袁。

一人を探しに行つたが蹴つてこない光彦と…

「ねえ服部君」

「何や？ 姉ちゃん、それに和葉」

嫌な予感は的中…なのか…

「歩美ちゃんと元太君もおらんのやー。」

三人組が迷子（？）になつてしまつた（？）

「ありがちだな」

その渚のコメントに

「異論はないわ」

哀は頷いた。

file .30

莓味の休日？（前書き）

花火ネタ在沖

「めーたんてー」

「やめるそれ気が抜ける」

「奴らが行きそうな所に心当たりないの？」

渚のその発言に足を止めたコナン。

「それもそうね、何かない工藤君？」

「確かに、所構わず駆け回るんは、探偵の足には合わんな」

哀、平次が続いた。

「一応、新一が一番あいつ等とは付き合いが長いしね」

渚が言った。

和葉と蘭とは別れて搜索。

博士には元の場所で待つていてもらっていた。

コナンは考えるが…思い浮かばない。

「…屋台の付近でも探すか。」

人目のあるあたりを探すこととした。

…その頃光彦は…

「待つてよー！光彦君！」

「いい加減元に戻らねえと怒られるぜー携帯もなってるし…」

歩美、元太は言つ。

光彦はただ、俯きながら歩き続けていた。

携帯や、探偵バツチから音はなるが、応答はしない。
そんな気分じやなかつた。

それは、

「渚ユウと哀シホ」を見てしまつたから。

すぐに、見つかりはした。
射的をしているだろうという話を聞いていたためだ。
だが…

声を、かけられなかつた。

彼^ア
女^イ
に
：

file · 30 莓味の休日？（後書き）

次は光彦君の回想シーン

走る。途中と売りかかつた射的をしていた屋台に。

だけど…

「はいば…」

声をかけられなかつた。

「ユエそれ！その人形とつて！」

「おっしゃ！」

「坊主！次は俺が勝負やで！」

「もうやめてくれえ！」

沢山の人だかり。

「俺の勝ち！」

「うつわ！ぼろ負けやん

「五月蠅いわボケえ！」この坊主が強過ぎなんや！

一発で、田標を仕留めた渚君

「はいよ。お田辺のブシ」

「ありがとう。」

そう言って笑う灰原さん

今まで見たこと無い、最高の笑顔で。

「光彦くーん！」

「光彦おー！」

二人が駆け寄ってきて、たまらずその場を走り去った。

見ていられなかつた。

灰原さんが、あんな無邪気に笑う灰原さんは見たことなくて

渚君はその笑顔を…

灰原さんにさせる事が出来るんだ。

ぼくには、無理だ…

あんな笑顔は…僕に向けられることはないかもしけない…

「あれ

哀はそんな声を上げて立ち止った。

「どうした？」

「ユエ、あれ…」

哀が指した先

「田舎君たちじゃない？」

光彦たちは

からまれていた。

理由はありがちなぶつかっちゃった…といつ

「タチの悪そうな連中やなア…って渚…！」

渚は走り出す。

平次は思わず追つてしまい

「平次お兄さん！」

歩美が名前を言つてしまい…無論

「お前がここつらの兄貴か…」

保護者として絡まれてしまうわけです。

「お前んとこ」の衆さん方のせこで怪我してしまつたんやー。
どないしてくれるん?」「

「いや、ちよ、待ちましょや、怪我へこひがぶつかつただけで
?」「

「治りかけやつたんやでえ……どないしてくれるん?」「

「痛い痛い!痛いよー!…」

「せうめつせいたがつとんやん……医者料だせやー…」

「ぶつ」

噴出した。

「渚ーお前のせこでこな事になつとんやんがー…」

平次は言へ。

実際こじで手を出したつていうが、

学校側とかオヤジから怒られるのは間違いなし。

いまほり、携帯出して平次の顔をひらひらと睨比べてるから……

(顔売らんとかな良かつたわ)

初めて探偵と言つ職に就いた(?)とこつ事を後悔した。

「行つて四日」

哀は渚に囁いた。

渚は笑いを止めた。

「俺はコトじやなによ。今は
『じゅ、渚』」

哀は嘆息を出し告げる。

「彼は顔を売つちやつたらかがり、ヘタで手を出せばいつのまにかわからぬわ
だから、どうにかして。」

その言葉で、一つ。ため息を吐く。

「どうにかって…どうすんだの。」「
「あんたならできるでしょ。アレを倒すべりこな
「灰原。どんなに強かるつと渚は…」
「再会した時。あいつは何をした?」
「あ、」

「どうも、渚の行動。

また一つ、ため息をつき渚は聞いた。

「それは、命令?」

その言葉に哀は

「いいえ、頼みよ」

そう答えた。

「なら、仕方ねえな。
」

「お兄さん。平次兄ちゃん離してあげて」

一瞬気が逆立つ作り声で言つた渚。

「ん？お嬢ちゃん。どんなにかわいい顔しても離せないねえ」

いかにもチャラ男が言つ。

「へえ。じゃあ…泣かせてでも離せた上さる。」

「は？」

「走りまわされてさあ…すんげえ虫の居所ワリイんだよな。
何言つてんのお嬢ちゃん」

周りの仲間も、笑つ。

そりやあ、小さな体で（お嬢ちゃんと間違われ）喧嘩を売られたって

「平次兄ちゃんめっちゃ喧嘩弱いし、ね？」

「んなわけないやろ！…いい加減なことで同意求めるなやー…」

「兄ちゃん喧嘩強いんやな？」

チャラ男は言つ。

「おつやあ…！」

そつ男が、拳を上げた…が

平次は避けていて、一発。

「やつちやつた」

と一言。和葉が言った。

「あれ？ 和葉姉ちゃんに、蘭姉ちゃん」

コナンが言つ。

「あ。」

蘭は漏らす。

それは渚が、

平次の行動（殴り）を合図に
ほぼ全員やつちやつたから。

「弱つー・ビリする気。パンツ脱がして田代に立って。」

と渚の「メンヒト」に対し、

「ニヤ…」

止める訳もな

「ニッその事生まれたままの姿で、田代りなんじビリ。」

哀は答えた。

「こや死ぬからー・田代つ無つてー・ひでかやの前にまわるー。」

コナンは止めた。全力で。

そして光彦は、

またショックを受けた。

file .33 莓味の休日？（後書き）

イチゴ味の休日終わり。オチ？考へてないです。

感想評価等々、お待ちしております。

file .34 花火（前書き）

珍しく事件が起らなかつた一行。
といって言えば、平蔵さんが酔っぱらつた事件。

ドー
ン

「花火。初めて見た。」

渚が言つ。

「私も。」

哀は頷く

「やっぱ綺麗。」

そう言って、艶やかに微笑んだ。

光彦は思わず見とれてしまう
少女の、大人びた言葉、全てに。

「コナン君
え？」

光彦は問いかけた。

「前に言いましたよね、僕に」

「何を？」

「僕には灰原さんは手に負えないって……」

「ああ……言つたな。」

過去の自分の発言を思い出す。

「今も……おんなじですか？」

「え？」

「今の僕でも、彼女は手に負えないのでしょうか？」

その問いに、

「ああ……」

そう答えた。

「無理だな。今のお前じゃ……」

「どうしてですか？」

光彦は呟く。

「どうして僕じゃ、ダメなんですか?ー」

「ナンは答える事が出来なかつた。

ダメなのは…

共に戦い、支える…

包容力が、足りないから…

渚には、勝てない

：

愛の深さが、違つかり

file · 35 手紙（龍書き）

悦感と嘔吐の癡節を詠はれたのである。

帰還したコナンたち。

渚の戦闘力（？）には驚いていたが、

渚が…

『お父さんがジッキー・チエンにハマった時にカンフーを教えられたんだ』

と適当にフカシ、誤魔化した。

実際は、傭兵経験があつたからと言ひつ。（でもカンフーは本当に教えられたことがあるらしい）

が、そんな話は過ぎたことで…

「好きですーー！円澤君ーー！」

と転校して間もなく、高学年のお姉さん（？）がいた渚と

「好きなのー江戸川君ーー！」

「好きぱらじー」行ってもモテる、露出度であった。

「『『一田ぼれです。歳の差とか私は気にしてません。出来ればつきあつてくれませんか?』』

「だつてさ。」「だから向よ。」

教室内。

机に座り、哀の前で頂いた手紙を読んだ渚。

「邪魔なんだけど?」「妬いた?」「妬くわけないでしょ。声真似気持ち悪い」「ウソ!完璧ジヤン」「五月蠅い!」

思わず、声を張り上げてしまつた哀。

「いみんなさい」

そう言つて、俯いた。

「あーそつか、」

渚はにやりと笑う。

「今度は向よ!」

「機嫌が悪いのは…」

手紙を哀の額に当て

「生理中か？」

「んなわけないでしょ……無くなつたわよーー。」

また口論

「ねえ、哀ちゃん。」

おずおずと歩美は聞く。

「せいいつで、何？」

哀は顔を真っ赤にしたまま、

「将来嫌でも来るようになるわよ」

やつぱり、俯いた。

普通の日々になるはずだった…時。

「あ、そうだ。俺とコナン。その娘に『デート』に誘われたから、遊園地へ『デート』？行つて来るね。」

渚の発言

「勝手に行け……！」

冷たくあじりつた哀であった。

「え、俺も行くの？」

コナンのその発言

「女性の誘いを断つちや、いい男の成れないよ～名探偵」

そう渚はワインクした。

「別になりたくないし」

セイコナンが呟いたのはいつまでもない。

「あのーなんで…」

光彦は憂鬱な空に向かつて言つた。

「尾行なんかするんですかあああ！？」

「円谷君静かに…！」

「見つかっちゃうでしょ…」

哀、歩美は言ひ。

場所はトロピカルランド。

田標は…

そう、彼らのテートを尾行けていた。

江戸川コナン 円澤渚

・・・・・

「さて、」

やはり、首元が隠れる格好であるが、ラフな服を着た渚。身長がそこそこあるため、小学校高学年には見えるだろ？

「バレてるのいつ気づくかねえ
…気づかねえンじゃねえの？」

渚の発言に、コナンは言った。コナンも同じくラフなスタイル。

「賭けんべ、毎に気づく一千円」

「それじゃ俺は事件が起つて気づく一千円」

そう言つた後。

「俺が当たつたら嫌だな」

「ナン」と言つた。

「やつぱ一千円じゃなくて五百円かけるね。」
「……たぶん当たるだろいな。」

勿論。

当たると想つた。

青空に向かつて、吐き捨てておきましょつか。

file .37 シンデレガール？

「あ、すみません。お待たせしました。」
「遅くなつてごめんなさい。」

相手方が現れた。

「いや、大丈夫。可愛いカツコだね、良く似合つ

渚は言つ。

二人とも小さくお礼は言つが、たぶん

尾行中の…アイツらには聞こえていない。

「 楠崎 杏奈 小学五年11歳
その妹、楠崎 沙良 小学一年生7歳」

「黒髪のセミロング。姉の方は少し巻いてるわね…
二人は色違いのワンピースにそれぞれのアレンジをしてるわね…」

歩美、哀と言つ。

ついでに一人は、歩美はスカート。なんだっけ、今流行ってる感じの格好。

哀は大人っぽく、ジーパンにハイネック。シンプルである。

ああ、たぶん聞こえてないね。

「何で、尾行とかすんだ?」

「静かにして、元太君」

「何かあるんですか?」

「五月蠅いわよ円谷君」

尾行してゐる理由ワケ

ええ、たぶん。

嫉妬でしょうね。

まあ、渚が5本目のアイスと、
コナンがコーヒーをブラックで注文したところで

「 あやめの花の香りがするよ。」

悲鳴が聞こえてきたわけです。

渚は言つ

「あ、坊ちゃん！アイス！」

「そこ」の女の子にあげて！」

悲鳴のした方へ走り

「元太！光彦！歩美！灰原も！…でて来い！」

「ナン」は隠れている皆の方へ声をかける。

「「「はつはい！！」」

3人は返事をして、共に走りだし、
哀は黙つてそれについて行つた。

「即死だな」

「ナン」は言つ

「江戸川君。白鳥警部が来るらしいわ」

「わかった。」

哀は携帯をしまい、現場を検証している渚のもとへ駆け寄つた。

「渚。」

哀は言ひ。

「ん?」

「あの……別に尾行^つけてたわけじゃないから……」

そう言って、そっぽを向く。

渚はその様子を見て、微笑み、

「あんまり突つこまないでおくれよ」

そう答えた。

で、植崎姉妹は?

放置
です。

file · 38 ツンテレガール？（後書き）

渚の身長は元太と同じくらいです。でも細見。

「遅いね」

樋崎妹は言った。
姉は静かにうなずき、

「行ってみようか」

「え？」

「渚君たちの所に」

うん！と、妹は元気良く頷き、一人は歩き始めた…

「さて、どうやって解決する?」

コナンたちに、大いなる壁が立ちはだかつた。
ええ、そうです。いつものへっぽこたちがいないのです……

「時間はかかるが…」

誘導作戦を開始した。

白鳥警部！」

それはそれなりに、可憐子がふたりやつて

「なにあれ、」

渚が漏らす

「得意なんですって、子供のフリ
「え、あれが地なんじゃねえの？」

哀と共に

「あせはねはせは（棒読み）」

耳に触るとかそう言つ前に、
只バカにしているだけ。

まあそんな事で、プライド高めな白鳥警部さんも…

「そりゃ、犯人は……」

やつと犯人を導き出せました。

意外にあつさりお縄に付いた犯人。

「…あつさりしてゐなア」

「渚。説明文（？）まで読むな」

「ヤダよ。これ愛読書なの？推理小説ばつか読んでる人とは違うの

？」

「悪かったなー。」

グダグダな会話文を終え

「で」

鈍感男？1 ノナン少年は言った。

「何でお前らつこってきたんだ？」

その問いを聞こ終えたとき渚は

（あー聞こひやつた。気づけよ）

そう本氣で思った。

「えーっと…それば…」

歩美はむじむじと囁いた。

「あっ、袁ちゃんが行こうって……」

「よつ姫田さん……」

渚も気づかなかつた意外な事実。

「へえ。」

にせりと笑う少年は

「何でつこてきたの?」

そう問い合わせるのである。

それは仲良さそうな光景で……

「コナン君ー!」
「あ、楳崎さん」

一瞬忘れてた、といつ顔をするコナン

「あそこで待つてて、行つたじやな……」「好きー。」

いやそれは、恥じる事もなく告げた思い。

「コナン君が好きなの……」

「ナン君は、赤面するビリウカ驚きのあまり固まっちゃつてしまふ。

警視庁の皆々様も同じく……（・・・）

「沙良……かつ帰るよ……もつー…

そう言つて樋崎姉は、妹の腕を引いた

「何で？お姉ちゃんはまだ言つてないよー…

渚君が好きなんでしょう？渚君に彼氏になつて欲しいって言つてた
じゅん！…」

「バツ……バカ」

そう言つてしまつ沙良（妹）。

「うひ…じめんなさい…」

赤面し、俯く杏奈。

渚は驚くこともなく、冷静に対処。

「謝る事じゃないよ。」

その言葉に、杏奈は顔を上げた。

「でも、彼氏にはなれない。俺は今はそんな風に考えられないんだ
よね。」

渚は言つ。

「で、ですよね…私なんて…」

「ストップ！」

その発言に、一回は手を止める。

「卑下するのはよくないよ？折角の自分の魅力が半減しちゃう。
”なんて”とか使うんなら、もつといい言葉があるよね」

「え？」

「自分をもつとよく魅せられる言葉が。」

つかの間の沈黙と共に、

「わ、私…」

杏奈は口を開いた。

「私だって…いつか渚君を振り向けせられるようになるんだから
…行くよ沙良…！」

そう言つた後、沙良の腕を引いて走り去つた。

file .40 シンデレガール？（後書き）

悦威 「えつと、えー…なんだっけ？」

渚 「うわー…」

えー言い忘れていましたが、今回のメンバーは

白鳥、佐藤、高木。

家まで送つて差し上げるは…

「そつか、”私だつて”か…」

「あ、あの？佐藤さん？」

高木、佐藤ペア。

の車に乗る、歩美、光彦、元太、コナンと…

「…アイス食い逃しちゃったあ…」

とうなだれる渚。

「あーウザい…！アイスなんかまた食べればいいでしょう…」

「限定品だつたんだよ…！」

「それアンタはもう四本だべてたじやない…！」

「食い足りねえんだよ…！」

と、それに食い掛かる哀。

「お前、ひつむを…」

やの「ナランの言葉で、向は鎮まらが

「ナニヤ、ナラン。沙良ちゃんに返事してない?」.

そつ沈黙を破る渚であつた。

「今朝のナラセマシテ。

田島はやつひりておつ、

「私だつて……やつか……」

やつひりておつと…

「ナニアアアアア~

ため息が絶えない高木であつた。

続
<

file · 41 中身は大人（後書き）

もうそろそろ組織を・・・出します。

file · 42

探す者と探される者（前書き）

組織。です。

「……」

「兄貴」

歌声が響く、酒場。

そう、とある巻に出てきた酒場。（マティニーの時ね）

「…信じらねえな」

冷酷なあの男。ジンはそう吐き捨てた。
ウォツカは、そんなジンを気まずそうに見ながら、一口酒を飲む。

「ロゼがあんな簡単に死んじまつなんて」

それは、追悼とかそういうのではなく

「ショリー同様。どこかにトンヅラにしてんだから

わざわざから吸っていた葉巻を、灰皿に押し付けた。
只の怒り、憎しみ。

「なあ、てめえが隠してるなんてこたあねえよな
「え？ そんなわけないじゃないですか」

ジンの問いに、慌てて弁解するウォツカ。

鼻を鳴らし、「お前じやない」そう強く言い。

「お前だ、お前！」

そう、一人のボーイの腕を引いた。

「おつお密さん…そつちのこ趣味で？」

「バカ言つんじやねえ、ベルモット！」

慌てていたボーイは観念したかのよう、面をはがした。

「…流石。私の愛するジンだわ」

そう言つて、ベルモットはジンに抱き着く。
ポーカーフェイスを崩さず、そのまま同じ問いをしたが、
ベルモットは、驚きはしたがそれを否定した。

「ロゼは…生きてるでしょうね」

そう言つて、長いプラチナブロンドの髪を振りほどいた。

「私が育てた。有能な殺し屋なんだから」

その青い瞳は、ジンを見つめ

「…だから、見つけても殺さないでね…」

そう哀しく訴えた。

「裏切り者は消す。それが俺たちのやり方だ。そんな情なんか捨て
ちまえ。」

冷たく吐き捨てた。

file . 42 探す者と探される者（後書き）

悦威「この一人好き？」

渚「こいつらが組めば、世界征服できそうだぜ」

哀「いや、ウオッカが居なければどうにもならぬいわ」

悦威「え？ 何で？」

哀「あの二人じゃ、ただの命令に聞こえてやる氣申せるもの」

悦渚「ふつ深い……！」

file .43 恐怖（前書き）

注意

この話はフィクションです！――！

「俺はベルモットに育てられたんだ。」

渚は告げた。

場所は、ジュディの家。

彼は組織から命からがら逃げだし、放浪していた所をFBIに拾わ
れた。

「…両親は分かるの？」

「さあ？」

「うつ誤魔化される事もあれば、

「どうして彼女がアナタを育てたの？」

「売られてた俺を、アイツが買ったの。」

「買つたって…人身売買なんてあるの？」

「昔はね」

そう簡単に話すこともある。

彼が口を開ざるのは、自分の生い立ちについてと…

「なぜ、シヒリーのもとから離れたの？何かわけがあったの？」

彼女との…

「ノーノメント」

過去…

・・・・・

「過去についてを…話さない?」

「ええ」

場所はカフェ。

目の前に置かれたコーヒーをすすり、
彼女の話を聞いていた。

「生い立ちと、貴方の事については…」

ジョディは頭を抱えていた。

だが、そう問われたつて哀は答を知らないし…

話す気にもならない。

「大変申し訳ないけど……私、
アイツが話す気さえもないと話を気にはなれないの。
それに、消したくなるようなエグイこともやっているしね、組織は。
」

そつ言つて、立ち上がる。

「「一ヒー御馳走様。あとついでに一つ。
真実を知ることがすべてじゃないの。隠した方がいい真実だつてあるんだから…
ま、日の光を浴びて過ごしてきましたあなたには理解できないかもしけないけどね。…」

そう大人びた口調で告げ、去つた。
ジョディは思はず言葉を濁した。
彼女を引き留めようとした席にまた座り、ため息を吐く。
「凄いでしょ」

大人びた声に振り向いた。

「俺、アイツのあーいうとこに惚れたんだ」
「渚…何で?」

結わいた長い黒髪を跳ねさせながら、ジョディの前に立つ。
「話したくなつたら話すよ。そんな気が起きたらだけど?」

そう微笑み、立ち去つた渚。

ジョディーの中に屈辱感が、廻つた。

それと

僅かの恐怖感

いつもの夕方 いつもの通学路

「なあ、アイス食おうぜー！」

「...」
「...」

「え、
買い食いはダメですよーーー！」

いつも会話。

「あら？ アナタは行かないの？ 諸君」
「全部制覇したもん、ココの」
「…え？ アレ全部？ 化けモンだろお前」
「失礼だぞ、江戸川少年」

キキツ

黒塗りの車が止まり

「え？」

二人の男に、

三人は連れ去られた。

「あれ…？ ドナン君？ 哀ちゃん？」
「渚もいねえぞ…？」

黒塗りの車に…乗せられた。

クロロホルムをかがされて…

「ええ、分かったわボス。」

ピッ

渚を始め三人は…

眠らされたふりをして、様子をつかがっていた。

「…楽しいわね、誘拐つて

そう鼻歌と共に告げた女に

「誘拐犯なだけに愉快犯つてか?」

渚はそう一言

「あら、ボク。起きてたの?」

「そう簡単に眠らねえよ。そう躊躇たのも、お前だろ?・ベルモット」

その一言と共に、残りの二人も起き上った。

「あら、流石ね口せ。眞理らなかつたんだ

残念と付け足し車を止めた。

「組織には伝えたのか？」

これはコナン。

「いいえ？ 私が見つけた獲物を、他の人に仕留められたらムカつくじゃない」

その答えに鼻で笑う渚。

「それに、シェリーだけは……」

ナイフと共に、言葉が飛ぶ。

「私が殺したいもの」

ナイフは哀の目の前で止まる。
強い、彼女の眼光と共に。

「Jの泥棒猫だけは許せない……」

そう発した。

「それで、何の用だ。ベルモット」

渚は言つ。

ナイフを離しながら、観念したかのように告げた。

「今日は、お誘いに来たの」

「え？」

「私たちを射抜ける、銀彈達に…」

奇妙な薄笑いと共に

「INの勝負、受けてくれるかしら、〇〇一銀弾」

白い、手紙をコナンに渡す。

その紙には、日時と場所、そして地図が描かれていた。

宣戦布告の言葉と共に…

「これは…？」

哀が顔を上げる。
渚は絶句した。

「受けれるぜ…」

「ナンは言つた。

「お前らのボス直々の誘いとやらにな…」

「やつと…」

「いい返事をあつがとつ

そう微笑んだ、ベルモット。

【 8 / 20 杯戸グランドビル】

そこが舞台。

「 ハハでいいよ」

その渚の言葉と共に、三人は車を降りた。
米花公園付近。

「 ねえ、 口ゼ……」

ベルモットの呼びかけに渚は足を止めた。

「 ここのパーティーは……実は……」

「 言わなくていい。」

続けようとした言葉を止めた。

「 なんとなく予想はついてるよ……取り合えずお礼でも伝えておこうか
れる?」

いつもの薄笑いは消え、

「 アイツこ

□元の笑みと共に、そう発した。

・・・・・

「コナン君ーー！」

蘭がコナンに抱き着き、

「心配せらるなバーローーー！」

小五郎がそう言つてコナンを小突いた。

三人は誘拐として警視庁に捜査されていたが、未遂という事で片付いた。

「温かいな」

「え？」

渚はそつ漏りした。

「探偵さんの周りは

その言葉にて、哀は少し悲しそうな笑みを浮かべ

「ホント…やうね」

そう呟く様に呟つた。

file · 46 crime (後書き)

宿題に専念するので、更新がストップします…すみません…！

悦威力イハ（—）ハ感想評価等々お待ちしております！

file . 47 優しい世界（前書き）

メイト、らじさんばんへ参上し、
沢山の「萌え」をゲットー！
明日も行きま～す。

美術部で出をなきゃいけないんですよ、絵。

久々のコラボ

「ふう」

ため息

パソコン前に向かい、作業をしていた灰原哀は盛大なため息を吐いた。

理由は…

「後遺症」

その一言が重い。

一つ、伸びをしてキッチンへ向かつた。

・・・・・

ピンポン

氣の抜ける音がするが、氣にしないでいただきたい。

江戸川コナンは、哀に呼び出され阿笠邸の前に来ていた。

「誰もでねえし」

そつぱやきながら、試にドアノブに手をかけると

カチャ

開いた。

「不用心だな」

そのため息をつきながら部屋の中へと、足を踏み入れた

「入るぞー…博士え、灰原〜?」

すると、田に入る、一つの姿があつた。

(つたく)

彼を呼びだした主。灰原哀はソファに身を沈め寝息を立てていた。向き合っている机には、コーヒーが入ったカップが置いてある。湯気はなく、冷め切っている。

キャラメルのような色をしたコーヒーは、砂糖の割合のが多く見える。

コナンに幼い頃から身につけられた、紳士としてのたしなみ(?)は、彼女に付近に合つたタオルケットをかけてやつた。

そして、辺りを見回すと、一つの紙切れが目に入った。

「博士は、不在か」

そう呟き、彼女が使つたままの、コーヒーメーカーを使いコーヒーを入れた。

いつの間にかタオルを握りしめ、静かに眠る哀の姿。

「黙つていりやあ…」

向き合ひ座り、

「可愛いのにな

そう感想を漏らした。

普段の姿とは反比例に、子供らしく眠る彼女

ゆらゆらと、コナンのカツプから立ち込める湯気は、まるで、今の時の流れのようだった。

宿題頑張るやうな…（-”-”-）

渚くん

ごくせん（原作）大好きだった悦威です。

夜の街。

鮮やかな街灯光る、夜。

鼻歌を歌いながら歩く、少年の姿があつた。

「あつた。」

そつ弦き、立ち止まるは…

とある、家。

【松田組】

戸を開け、

「じいさん。居る?」

そつ屋内に声をかけた。

・ · · · · ·

「おう、坊主。この前の事件以来だな」

そう言いながら、渚を出迎えてくれた人物。

カラオケボックスでの、殺人事件の犯人の関係者。松田組組長。
そして…

「例の事、聞きに来たのか？」

放浪していた彼を引き取った、正真正銘の人物で
”黒の組織”と関与する人物。

「ああ、そうだね。どう?裏切る気になつた?」

渚は言う。

彼は黙つて頷いた。

「協力するよ、ロゼ…いや、渚」

その一人のやり取りに、

他の組員たちも、覚悟を決めた顔つきになつた。

file · 48 関係（後書き）

もう既に、深夜の予約更新は止めました。

「エヴァンゲリオン」見ましたか？

実は渚君は、エヴァから来たんですね…。（笑）

林原さん演じるレイから、緋色の瞳を。

カヲルさんから渚を。

月は使いたくて探しました。

ユエは実は後付け（笑）

file . 49 痕跡続ける体

『A Thank you Nagisa, inspection
n are the end (ありがとう渚、検査は終了よ)』

ジョディの声が室内に響く。

渚は検査服を着込みながら、田の前に現れたジョディに聞いた。

「俺の体は、持つ？」

「え？」

物憂げな緋色の瞳が語る。

「アイツの成長、見守れる位持つかなア」

そう呟く様に。

ジョディは渚の言つ（アイツ）が哀だという事を語った。

「わからぬいわ。でも、このままではギリギリ。無理に近いわね」

そう答えた。

渚は、ガラスに映つた己の姿を鼻で笑う。

「だよね。」

そつと、検査のために乗つっていたベッドっぽい、山ツイ機械から飛び降りた。

その場にいた、医師から暖かいココアを渡された。それを啜り、そして、憐れむような顔をしたジョディを見た。

「やめてよ、その顔

「え、あっ、ごめんなさい…」

「別にいいけどさ…憐れんでも。」

渚は歳に、似合わない表情をする。
少しそみしそうな、諦めたような、そんな表情^{かお}

「確かに可哀そうかもしれないしね」

そう言って、ははっと、声を立て笑った。

「所詮この体は遺伝子操作された躰。
人殺しの為に生まれたにすぎないし、本当は俺に感情なんてなかつたかもしれない。」

俯くジョディ。

渚は構わず続けた。

「俺が人を殺そつとしたのは過去に一度。一度田はジン。それと…」

また一口、「コアを啜り、告げた。

「一度田はショリー。だから俺は会いたくなかった。」

ジョディは驚きが隠せずにいた。

「でも、会いたかった。抱きしめたかった。触れたかった…矛盾し

てるよな

そう言つた。ジョーティは首を横に振る。そして「少しわかるわ」と答えた。

「私だって、シユウを探してゐ……ずっと……もつひいのは分かつてるのに」

涙を流しながら、

「でも、探さずにはいられないのよ。私は彼に逢いたい。触れたい。あなたと似たようなもの……矛盾してゐるのよ……」

その言葉を聞き、渚は驚愕した。だがそのことを悟ら寝ぬよつ、ハンカチを手渡す。ジョーティはお礼を言いそれを受け取つた。

「……か……アイツもいい男だったしね……妖しかつたけど……」

そう、少し笑つた。

「アイツ、ジンとロンモが被つてた。もう一度見たときは切つてたけど」

そう言つて、すぐ切なくなる。

彼は、宮野明美と情報収集の為に交際していたのを知つている。そして、それが原因で組織に切られたことも……またそれをきっかけに、志保が組織を裏切つたことも……

硝子に映る、幼くなつた自分の姿。

しかし変わらず、裏切りの刻印は首を伝つ。

「明日…死ぬかもしれない」

そう呟く己の状況。

弱り続けるこの体。幼児化したことによってより悪化した。

「死ぬ…か」

小さくなつた手。

「ジヨーデイ」

名を呼ぶ。「何?」とハンカチを握り、返答した。

「俺の体、強い発作に耐えられる?」

その問題に

「無理よ、一回来たら確実に死ぬわ」

即答した。

決戦の日まで、

あと僅か

file . 49 痕跡続ける体（後書き）

次回かな？決戦の回…いや次の次ですか？

よろしくお願ひいたします。

file . 50 GAME! (前書き)

決戦の章スタート!!!!

ちなみに個人的に、諸君の声のイメージは、遊佐浩一さんです。
誠に勝手ながら、すみませぬ。

「悪いな、博士。」

「いや、いいんだ。お前の話を聞いた時点でワシは、頼りになる勇者じゃからのおー！」

「あ、そう」

博士の言葉により、「ナンは感謝が薄れたがそのままパソコンを立ち上げた。

「とりあえず…俺は裏方だ」

「おう。指示頼むぜ」

「頼りにしてるわ」

渚、哀と続く。

いや、ユエと志保…かな?

二人は元の姿に戻った。

幼児化していることがバレない様に、コナンが元に戻らなかつたのは彼、工藤新一は死んだ事になつてゐるからだ。

この回には、組織の幹部は全員出席。もちろん…宿敵ジンも。

「の方」の護衛に回つてゐる。

「…渚お前…」

「ナンが少し真面目に

「化けたな」

そう言つた。

渚は女装で正装している。

彼も死んだ事がバレない様…いやもうバレているだろう。

黒い、チャイナドレスに身を包んでいる。（ちなみにロシング）

「女にしか見えないだろ？」「

「変装術は、ベルモットに？」

「まあ、そうだねえ…正しくは大泥棒さんにかなア」

「大泥棒？」

「こちらの話よ

「…そつか」

そんな話を聞き流しながら、志保は耳に博士が発明した
発信機も内蔵させた、イヤリング型携帯電話を付けた。勿論渚も。

志保は黒に近い緋色のロングドレスだ。

「やっぱ似合つね、緋色。白い肌が良くなれる

「セクハラ罪で訴えるわよ」

そんな雑談をしながら、

「着いたぞ」

博士は言つ。

彼のビートルのナンバーは、渚が付け替えた。
偽のナンバー。彼らに身元を探られないため。

「シェリー」これからお前は、前田美子俺の双子の姉だ、頼むぜ?
「分かつてゐるわ、貴方こそボロを出さないでね?私の妹、前田真子
さん?」

二人の元の容姿とは全く違う、可愛らしい少女に変化した。
偽名を使い、煌びやかなショーの舞台へ、足を踏みいれた。

「よし、博士。例の空地へ」

「分かつた。気を付けるんじゃぞ!一人とも」

博士の呼びかけに、二人は強く頷いた。

「堂々と行くんだぞ?美子。」

「分かつてゐるわよ、私に命令しないで真子」

file .50 GAME! (後書き)

感想、評価等々お待ちしています。

「上手いな、このワイン」

「ホントね」

そんな一人に、

『てめえら、ちつたあ緊張感を持てえーーー!』

とお告げが入った。

・・・・

「お招き有難うござります。社長」

「一人とも来てくれてありがたいよ

大手企業社長に、志保の言葉と共に一人は頭を下げる。

「いいえ、お世話になつてゐる社長の誕生日祝わなくてどうするんです?」

渚は言った。

穏やかな序章。

しかしそれもつかの間。

「やっやめて下さい！華子様……」

「ひひひああああああーッ…………！」

執事らしき男と、白いドレスに身を包んだ女性が口論をする。

「どうしたのかしら」

志保が渚に呼びかける。

「なんか、変だな……」

「確かに……様子がおかしいわね」

そう一人が言った瞬間

「危ねえ…………」

渚がそう言つて、女性のもとへ駆け寄つた。

それは、

客たちは田を瞑つた。

彼女が大きめな窓から落ちそうになつたから。

file .52 switch (前書き)

最初はおつかやんだそうかなあと思つたんですが、やめました。

静まり返った舞台。

志保は恐る恐る田を開けた。

「ゆ、真子！..」

そう言つて顎け寄る。

渚がぎりぎり間に合ひ、女性の腰を抱き墮ちていない。

助かつたかのよう見えた。

「彼女は？！」

ぐつたりしている、女性。

「…死んでる。」

渚は眩く様に言った。

志保は驚きながらも、脈拍を確認する。

それは冷たく、動かない。

「嘘でしょ？..」

なぜ？

落ちていないので、

彼女は死んだのか……？

・・・・・

しばらくして、警察も来たが、青酸反応があり彼女は自殺という事で処理された。

渚も怪しまれはしたが、所持品に異常はなく
彼女は、覚せい剤の常習者であることも分かり
様子がおかしかったのはそのせいであろうといつ事になった。

しかし…

彼女は、きっと組織に殺された。

限りなく、自分たちに足がつかないようつい殺る

それが組織の事が表舞台に立たない理由^{わけ}

彼女の死を合図に、もう既にゲームは始まっていた…

がしゃあああああンツつーーーーー

そんな大きな音と共に、シャンティリアが墜落しそして電気が落ちた。

人々は引くよつて去つていく、場内は勿論パニック。

志保は、

「…とんだ齧が迷い込んできやがつた…」

ジンに銃口を向けられていた。

「…なぜわかつたの?」

志保の問いには答えない。

「その変装、いい加減解いたらどうだ?..」

重々しく告げる。

「シヒリーーー!」

「待ちやがれ……」

ジンの罵声と共に、志保は一心不乱に走る。

「助けて……」

小さく呟く様に、

「助けて、ゴトー。」

「…兄貴? しませんぜ?」

「探し」

「へい」

革靴が地面をける音、

全てが突き刺さるよう、恐怖と身を震わす。

「大丈夫だ、シホ。落ち着け」

「…」

そう、包み込むように安らぎが広がる。

それは、別の場所に居る新一にも伝わっているようで、

息をのんだ。

「チツ！…！」

大きな音と共に、

「兄貴、ボスから回収命令が」

「五月蠅い！分かつてゐ！」

肩が震えた。

二人の男は去つた。

それは…

「見いつけた」

黒い影、

「の方」自身が彼らを見つけたから…

パンツ

パンツ

数発、音が鳴る

そして薬莢が転がった。

暗闇の中を走る、

生きるために…

「名探偵ーーここに隠れるとこはーー？」

『え？！』

「逃げたら身元がばれちまうかもしれないだろーー！」

コナンの助言により、避難用の梯子を伝い、屋根裏へ志保を送った。

息が上がる。

湧き上がる恐怖…

しかし、妙に脳裡は冷静である事が不思議だ。

「お前はそこから逃げろ、いいな？俺はアイツ熨してから行く

「でも、」

「いいから」

パンツーーー！

間髪の無い、音。

「ぐあつ

渚が小さく悲鳴を上げた。

「ユニー。」

志保は声を上げた。

「行けー。」

渚は絞るみつけていた。

だけど、

(足が…動かない…)

体中に、突き刺さるような恐怖。

「その表情、よおーく似てるよ……てめえの母親に

「あの方」は、満身創痍とともに、高々と語った。

「殺したいほど愛した、あのクソあホ女になア…」

『え…?』

思わず、その話を聞いていたコナンが声を上げた。

そして、ロゼは…

「実の息子を撃つなんて…とんだクソ親父だな…」この野郎

苦痛に顔を歪ませ、吐き出すように呟つた。

黒いドレスに、鮮血がジワジワと、撃たれた右肩から染みた…

「ナン君立たなくて」「めんなさい。」

本当に「」めんなさい、凄く「」めんなさい。

謝りても謝りとも呪りません。「」めんなさい。

なんか「」めんなさい。一種のパラレルとしてお楽しみください。

file .55 DEATH (前書き)

残酷描写注意で「Jギ」こます。

「どうしたんじゃ、新一」

人気のない、裏路地に…
黄色いビートルが一台。

その中で、コナンはまるで雷に打たれたようになり、恐怖と叫つものにてんぱえていた。

それは、阿笠博士も、初めて見る表情であった。

そして、重々しく… 真実を告げた。

「渚…いやロロゼナ…」

その様子に、生唾を呑みこむ。

「…“あの方”の息子らしい…」

その時代、「

「……やがて、

た。」といふ様に、

・・・・・

パンツ

その銃声に、志保は体を震わせた。

「いつ・・・たいなあ…

撃つたのは渚

痛みのせいか、少し位置がそれ、
左わき腹を銃弾たまが通り抜けた。

そんな姿が、実の父だとしても、油断をしてはいけない。

「ガツ！-！-！」

間髪入れず、その脇腹を蹴り込んだ。

血を吐く、『あの方』

パああああンツつ

渚は、悲痛に顔を歪ませたが、

渚が装備していた拳銃で、相手の足首を打ち抜いた。
これでもう、取り合えず歩けない。

そして走り出し、避難用の梯子に足をかけ、

「逃げるぞー！シホ」

そつ言つて

「名探偵！指示を！――！」

”三人”は脱出した。

file .55 DEATH (後書き)

三人目とは...?

file .56 Drag(前書き)

サッカー見ました。勝てて良かつた。

「乗れ！渚！灰原！！」

コナンの気転により、会場の付近に車を止めた。

「助かったわ。工藤君」

そう言って、二人は車に乗り込んだ。

いつ戻つても大丈夫なように、タオルを被る。

しかし、

「博士、早く家に」

「え？」

「ユ工は氣を失つてゐるのよ！！」

「え！？」

ぐつたりと、微動だにしない。

顔色も恐ろしく悪い。

「血が止まらないの。動脈をやられたかも」

鮮やかな鮮血が、白いタオルを染めていく。

なるだけ早く、自宅へと車を急がせた。

・・・・・

なんとか、手当は出来た。

途中、発作を起こし子供の姿に戻った。

場所は…病院だ。

「…組織と接触した！？」

ジョディは言つ

そう…FBIの元へ頼り、内密に処置を施した。

「それで渚は撃たれたというの…？」

「ええ、そうよ」

「…そんなこと言つたら渚の正体が…」

「それは大丈夫」

哀の姿となつた志保は言つ。

“元の姿”の戻つて、奴らに接触したから

そつ、表情を変えず告げた。

ジョディを始め、皆々は驚愕した。

「もともと、彼らの服用した毒薬は私が作成したの、データはないけど、短時間効果のある解毒剤は開発できているわ。」

哀はそのまま、淡々と説明を続けた。

「それには、効果が強い分、強い発作が起きるわ。そして、副作用もあるかもしねり」

そう発した時、ジョディは「ちょっと待つて」と話を止めた。

「おかしいわ、何で…」

「え?」

「彼の体はもう、発作なんかに耐えられないはずなの

いかにも動搖したような表情をし

「なぜ、生きてこられるの……？」
・・・・・

その言葉に、哀は

驚きを隠せなかつた。

(……嘘でしょい……)

file .56 Drag(後書き)

テストで、『被る』とで、「かぶる」と答えました。

正解は「ひむる」でした。チーン

それから数日。

ふと、渚の躰に異変が現れた。

「細胞が…正常に戻ってる…？」

そつと云えられた哀。

「アンタって、遺伝子操作されて…」

「あ～うん。細胞の構造自体可笑しかったんだけど…」

「APTX4869の作用により…正常に戻ったって事?」

その言葉に曖昧に返事をした渚。

APTX4869は細胞の自己破壊プログラムの偶発的な作用で、神経組織を除いた、

骨格・筋肉・内臓・体毛……それらすべての細胞が幼児化の頃まで後退化してしまうという毒薬。

これは「ミックスでも説明したとおり。

この毒薬にはDNAのプログラムを逆行させる作用があり、アポトシース現象を利用し、

細胞と細胞を結合させる。結合と言つても細胞同士の対等の結合ではない。

分裂により親細胞と子細胞に分かれるが、

子細胞がアポトシース現象を起こし親細胞に吸収される形の結合である。

そうすると細胞間でプログラムが逆行し若返ってしまう…

ちなみに、新一と志保が幼児化しき残ったわけは、肉体の年齢にある。

17歳と言えば、第一次性徴から大人になるまでの微妙な肉体である為…

成長はある時点で止まってしまうのが普通。

しかし、APTX4869が作用し逆行させる。

「ま、詳しく述べは悦威^{エクスコ}が参考にした”コナンドリル”でも読んでくれるかしら?」

「うむうむ…」

「ま、あなたの体は老化現象^{テロメア}の作用とかの様子が見られなかつた。」

哀は言ひ。

「今の姿を見ると、成長と言えば身長があつた程度にしか見えないわ。」

「まあ、大体そうだね」

淡々と告げた言葉。

「そして私たち3人の共通点は頭脳。天才と呼ばれるほどの頭脳があつたわ。」

そこが作用したとも思われ、そして渚が幼児化したという事は…

「あなたの肉体はたまたま私たちと同じ、”第一次性徵途中の肉体

”であつた…」

「運が良かつたんだな。俺」

ホントね、と呟きながら哀は…

静かに微笑んだ。

file . 57 無色（後書き）

ジュエルペット見てます。水城花音が好きです。

重たくて申し訳ありません。

まず、APT-X4869の最初の被験者となつた、工藤新一
若干高校生ながら名探偵と呼ばれるほどの多彩な頭脳。
そしてサッカーの名手。

そして、第二の被験者、富野志保

富野博士の娘で科学的技術が極端なほどに長けていた若き天才科学者
そして、APT-X4869の開発者。

第三の被験者、ロゼ

「あの方」の血縁を継ぐ唯一の人物で、遺伝子操作で生まれた子
緋色をの瞳を持つ、天性の殺し屋。驚異の身体能力を持つ…

さて、共通点

皆、天才と呼ばれている。

「…何見てるの？」

プラチナブロンドが、跳ねる。

薄笑いを浮かべた、妖艶な女性。

「ちよつとしたデータだよ」

問い合わせられた男は静かにそのデータの入ったパソコンを閉じた。

「相変わらずの秘密主義ね…」

「お前もだらう?」

そつと寄り添いあつ二人、夜景に反射したガラスに映る二人の姿。

「ベルモット…」

「私はシャロンよ、ボス」

二人は見つめ合い、苦笑した。

男はそつと、甘えるようにベルモット…いやシャロンを抱き寄せ。シャロンもそれに従つたよつて、男の首に腕を絡ませる。

「で? 今日は何事かね?」

「晩酌でもしようかと思つて…」

「…なにが呑みたい…?」

その問いに、そうねえ…と首をかしげ、

「身も心も若返るような…秘薬かしら…?」

その答えに、男はふつと笑う。

「おかしいかしら?」

「ああ、それ以上若返つてどうする?」

その答えに、小鹿鹿にしたよつてシャロンは

「女扱いが上手くても、まるで女心が分かつてないのね」

そう発した。

「女はね、貪欲なのよ。欲望が尽きる事はないわ…
永遠の若さも、美しさも…全て手にしたいの。
たとえ…どんなことをしても…ね」

窓ガラスに映る、今もなお変わらない若さを持つた美しい女と
黒髪に東洋顔の端正な若い男…切れ長の目が良く目立つ。
ロゼとは異なった印象がある感じの男である。

「怖い女だ」
「女はみんな怖いわよ…」

そして静かに微笑し、

運ばれてきたショリー酒を開けた。

file . 59 好物（前書き）

ある日のジニア宅

「美味しい」

そう探偵団を始め、蘭、園子ももらした。

皆々はパスタを食べ、笑顔になる。

「オカワリは自分でしろよ…特に元太。
渚！ オカワリ！」

ある日のジョディ宅。

皆々は学校帰りに、渚を訪ねた。

怪我を理由に少し休息を取っていた彼のお見舞いの為に：

「…懐かしい味ね」

「え？ なんか言つた？ 哀ちゃん」

哀は微笑み「なんでもないわ」と答える。

渚の怪我はもう治りかけ、明日には登校出来るらしい。
パスタを作ったのは渚。

哀が懐かしそうに食べるパスタ。

それは過去に二人が暮らしていた際、よく”ユエ”が作っていたものであった。

「…って言うか渚」

そんなのんびりとした空氣に園子が突っ込んだ。

「炭水化物に炭水化物つてどうよ」

それもそのはず。パスタに対しサンドイッチが出される。
中身は、ブルーベリージャムにピーナッツバターを挟んだもの。

「美味しいからいいんだよ」

渚はそう言つて微笑んだ。

その言葉に園子と蘭が、一つ食べてみる。

「「甘つ…」「

二人が揃つて言い、光彦が「ですよね」と同意した。
さりげなくコナンはそれを見ないように、パスタを平らげ

「渚、ちょっと」

そう呼び出し

「私も行くわ」

いつの間にかパスタを食べた哀が立ち上がり、
一つサンドイッチを掴み一人の後を追つた。

その様子を遠目で見る一同と、鼻歌を歌いながらワインを開けるジ

ヨーティ。

「仲いいよね、あの三人」

蘭が言った。

「そんなことない、」と歩美と光彦は言つが高校生組には三人は親密そうに見える。

特に…コナンと哀は…一人で会話している所をよく見かける。渚についてはどこか、二人…特に哀となるだけ距離を置こうとしているようにも見えていた。

事情を察したヨーティは空気を変えようと、

「サラダはどうだ?」と上機嫌に皆々に勧める。

「渚、このサンドイッチ好きなのよ。自分で大量に作つて食べて…
ものす」ぐく甘党で困つてるのよ…」

ヨーティはそう言い「身体に悪いわ」と続けた。

蘭と園子が愛想笑いをする中、

光彦は渚が作つたというサンドイッチを見つめたまま、ざことなく不安を覚えた。

file . 59 好物（後書き）

OVAのネタを引用。

しかしですね、私も好きですよアレw

あんまり関係ないですよ、好物が一緒なのは

そう光彦君に伝えてやりたい…w

夜の街

ネオンが輝く繁華街。

見たような景色を、彼は何度も見たことがあった。

「おー、嬢ちゃん…そんなところに来ちゃあいけないよお

金髪で、いかにもチャラそうな若者が声をかけた。

「お友達の家に行くなよ」

悪意があるのを知つていながら、子供らしく答えた。

「一人じゃ危ないよ…連れて行つてあげるよ…」

怪しく笑う、男。

わざわざと男の仲間らしき輩が現れた。

(仲間か…?)

そう思つと、彼は妖艶に微笑む。

「ほりおこで、」

くづくづくと、笑みをにがくづぶしながら、男は言った。
彼は、

「『Jめんなさい、変な人にはついて行つてはいけないと言われてるの。』

悪意があるように、告げる。

「じゃあね、ロリコンのお兄さん」

バカにしたように言った。

すると、やはり…

(狙い通り…?)

「バカにしやがって…!」のクソガキいいいいいい…

一発。

顔に入り、飛ばされる。

それは彼が子供の姿であるから…

口の中は切れてはいない。

しかし、見るからに頬が真っ赤だ。

ざわざわと大人たちは口々に痛そうだと、助けておやり…そろ呼ぐ。

「正当防衛」

彼は呟いた。

「Jの怪我なら成立するよね」

彼はそう微笑み、男に向かっていく。

そしてその数人は、しばらくして彼に助けてくれ、やめてくれとせがむほどぼろぼろにされた。

彼の中に眠る狂気がうずく
刻まれた狂氣…殺意と言づ知の…

「ヤダね、」

「ぐああああ…！」

ボキッ

骨の折れる音が鳴る。

苦痛に歪む顔が…たまらない…

「死ね？」

ふつと、風邪を着る音が鳴る。それは彼の拳が振り下ろされる音…
殺到に集まる人々は、驚愕した。

それは彼の手が止ったのだ。
男の目の前で…

「残念」

彼は苦く言葉をつぶした後、走り去り

やがて、警官たちが現れた。誰かが通報したのか、助かった。

人々は思つ。

しかし違つ…彼の手を止めたのは…紛れもない…

「遅かつたな、ロゼ」

「爺ちゃん、悪い悪戯してきた」

(傷つけないで)

彼女の言葉…

file · 60 狂氣（後書き）

支離滅裂う

傷害事件

卷之二

•
•
•
•
•
•
•
•

「おこーお前ひーあんまり遠くへ行くんじやねえぞーーー。」

「」「」「」

海

「なんかコナン君…」

快晴の空。

「お父さんみたいだね」「え？！」

蘭は言った。

「蘭さん、それはあまりにも氣の毒じゃないかしら。」

六、政治上之問題 [卷之三]

「一応、お父さんという年齢ではないじゃない?」「

悪意たっぷりと軽く口に呟き言つた。

蘭は、一、「あ、」と叫んで、田中さんに向かって謝る。田中さんは苦笑いした。

「ほおー、蘭！早く行くよ！—せつかく博士が連れて来てくれたん

「あ、待つてよ園子おーーー！」

一人は服を脱ぎ、中にあらかじめ来ていた水着になつた。着替えシーンを期待していた諸君、実に残念だつたな」

「渚、誰に向かって言つてゐる？」

「あら、探偵さんは妬いてるの？」

「蘭ちゃんつて安産型だねえ」

「痛えつ……！」

コナンの足が、渚の腰にクリーンヒット。

「ばーか」

哀は着ていたパークーを脱ぎながら、ぼそりと悪態を吐いた。

「んじゃ、俺も海に入ってくれつかあ」

「私も」

コナン、哀は言ひ。

「わしは、車（と荷物）をペンションに置いてくるな」

「俺も行く」

「海には入らんのか？渚君

「泳げねーんだ」

その答えに納得したよつこ、博士は頷き

渚を車に乗せた。

「ここいら辺に居るんじゃぞおー。」

「わあつてるよ」

コナンにさう言ひ聞かせ、車を発進させた。

水は、清く青く。爽やかだ…

「都会にしては綺麗ね」

哀はそつと呟いた。

「渚つて泳げねえのか…意外だ」

「あら？どうして？」

「何でもかんでもできるように遺伝子を改造してんなら、
何で泳ぎだけは出来ねえのかなって…」

コナンの言葉に、そつと哀は微笑み、言った。

「人間らしいところもないと…可愛くないじゃない？」

海の回。熟成します。変な文。

「鍵です」

「ありがとうございます」

あつわりした会話を終え、ロビーの椅子に体を埋める渚の元へ行った。

「1412号室の一いつだやうじや
「キッズじゅうじやん」

その番号を聞いて、渚は笑った。

「知つとるのか?」

「有名だからね、ここに現れちゃつたりして?」

そう言いながら、荷物を持つ。そして

「なんか、探偵さんと縁があるみたいだしね

そつ付け足した。

「ちよつといせじゅな」と博士は答えた。

・・・・・

ドスツ

それぞれの部屋（男子部屋、女子部屋）にそれぞれの荷物を置いた。

「…園子君の荷物が重かつたのあ

「女の子だからねえ…」

渚は、冷蔵庫を開け、中を見る。

「麦茶がある。飲む？」

「ありがとウ…」

博士はベットに腰掛け、麦茶を一気飲みした。

荷物運びは結構きつかった。

お高いホテルとかなら手伝ってくれたりするんだろうが、小さなホテルである為、人が走り回る。

どうやら結婚式が近々あるらしく、従業員が走り回り、人手が足りない状態であった。

「海にこだわり過ぎたみたいだねえ…」

渚は口の中でつぶやいた。

「…やつ言えば渚君泳げんと言つておつたな？」

「あ、うん」

「何で海に行ひつと君は希望したんじや？」

夏休み、海か山かといつ提案に渚は海を即座に選んだ。

「あー……なんか……見晴らしこじやん、色々と?」

「せうじゅう理由なのかい」

博士は言つたが、なんとなく……

(哀愁の為かのよ……?)

と、ふと考へていた……

file . 62 怪我（後書き）

この前国語の授業で「小説書いつか…！」

とか言つのがあつた…

おもづくぞ癖が出来ましたw

行を変えまくりw

どうでもいいこや、もかつ

紙に埋まりたい。

「おお～絶景だねえ」

「ホントだあ！すゞ」おいー！」

夜景に歓声を上げる二人

「子供ね、まったく」

一人、美しい容姿を持つ女性が呟いた。

「三人とも、夕飯を食べましょう。レストランがあるそつですよ」

その声と共に、部屋から駆け出した。

「美味しい」

・・・・・

「本当ね」

アダルト組（渚、哀）
感想を漏らした。

「…お、美味しいって…」
光彦は漏らし、皆々はそれに同意した。

「食わず嫌いはイケませんよお」

渚は言った。

並べられた本格中華。

でも皿のものは皿ののだ…！

「…上手いけど…まあ…」

「ナンはもう「メントをつけて…」

（これが何の肉か聞かなきやよかつたぜ…）

「あれ？」

と、声が響く

「「ナン君じゃないですか」

「はつ…白馬…お兄さん…」

「え? 誰?」

渚は聞く。

「白馬探…警視総監の『』子息で、海外を中心に活動している高校生探偵…

様は、東の服部君と似たような感じね…」

哀は答えた。

「あら？ キッドハンターの…」

「わあー本当に子どもだったんだあ～」

正反対…といった異なった容姿を持つ二人は続けて言った。

そして…

「青子、紅子。誰がいたって？」

「あれ？ 快斗、トイレにでも行つてたの？」

「げ…」

「え…？」

コナンは皿を見開いた。

それはまるで、

「ああ、彼は僕のクラスメイトで…」

好敵手ライバルに出会つた時の感触…

「アビシニヤン黒羽路一の皇子…黒羽決斗番だよ」

file . 63 好敵手（後書き）

じゃんけん選抜。

才加が入つてよかつたわあ…

新曲はたぶん買いつと思つ ｗ

二人は、言葉を無くした。

「…どうした？」の一人…」

そつと、哀に耳打ちする渚。

「そうね」と一息おいて、哀は言った。

「せしづめ、運命の出会い…と書いたところかしら？」

そつと、

ふふ、探は微笑んだ。

・・・・・

「いや、まじで！今回の予告とりけせねえかなア」
『ダメです！今回限りのチャンスなんぞー！そのチャンスを無駄
にする気なのですか！？』

・コトイレ

あの「ナンの様子、視線から、
ああ気づかれたと、にがく言葉を飲み込んだ快斗

『盗一様の死の真相が…やつと…分かるんですよ』

突き刺すように、寺井の言葉が快斗の背中にのしかかる。

そう、やつと…

やつと、終わらせられる…

青子に嘘を吐く必要が無くなる…

でも…

「分かってるよ、爺ちゃん。嘘。大丈夫。」

でも……

「心配しないで、俺はキッドだもん…つ…だから」

ばれたら…誤魔化しきれる自信がない…

「心配しなくていいよ。面つまみただけだから。」

ナリだよ…

電話の通話ボタンを押す。小さな電子音が個室に響く。

罪悪感がない訳じゃ無い。いつも…押しつぶされやつくなる…

「俺はキッド……不老不死の大怪盗……」

俺は誰だ？

正しい姿が、上手く統合されなくて……

暗闇に紛れて、分からなくなる。

「怪盗キッド……」

由コマントを掴めば、

「ひ、

カツ

もう、犯罪者じゃないか……

「なあ、俺

キッド

また、鏡に映る、自分に問いかける。

詳しい話は別話で…かきます。

時は遅れて現れた、中森警部。

怪しい笑みを浮かべて……俺は……

「お待ちしてましたよ、中森警部」

ほら、微笑んだ。

それは、コナンの中で

黒羽快斗＝怪盗キッドの方程式が成り立つた時で。

「キッドが…」

まるで幻聴の様に、耳に触れた言葉。

「泣いてる…」

竜子の言葉に、「まさか」と紅子は呟いた。「

顔を見るが、泣いている様子はなく、いつも通りの無表情

ポーカーフェイス

「まさか…ね…」

やうやうと、言靈が罪を犯し続ける彼をあざ笑つかのよつて

怪しい月明かりが、彼を照らして

小さな舞台を作り上げた

「はつ、はつ……」

白毛驕びどが駆け抜ける。

奪つたのは、真つ赤に燃えるガーネット。

「待ちやがれ！ 怪盗キッド！ ……！」

発砲

見事に足を貫いた。

「つあ……」

白い扉が、痛みに揺れる瞳に映る。

出口だ!!

そう、開いた瞬間。

暗闇と、紅いネオン。

壁上…

翼を奪われてしまつたキッズヒロヒロの…

鳥籠でしかない…

「…怪盗キッド…観念しな」

押し殺すような男の声が聞こえる。

もうだめだ… そう感じ、やつへ皿を開いたとき…

「…助かりたい…?」

頭の上から声が聞こえる。
甘く、囁くようにしみこむ。

きつく閉じていた瞳を開放し、顔を確認しようと目線を上げた。

「…名…探偵…？それに…」

彼と一緒に居た、少年と小さな科学者。

「助かりたい…？それともこのまま朽ち果てる…？」

名探偵の右横に立つ、少年が囁く。

先程の声は彼の物だとすぐにわかった。

甘く…俺の胸に染み込むように、染まっていく。

覗き込む、ガーネットの様に赤く、燃える瞳が問いかける…

「…白き罪人さん…？」

差し込む月明かりが、照らす。

「助けて…」

『Wish
of
the
poignancy

file . 67 抱擁（前書き）

…詳しこ話を書くと面倒でしたが、せつぜんせぬまや。

申し訳ありません。ごめんなさい。

「いって……もうちょっと丁寧にやれよアホ子……」

「これくらい我慢しなさい！バ快斗……」

ほほえましき二人の姿に、苦笑する紅子と探。

「でもまさか、自分からカミングアウトしちゃうなんてね」「え？何がですか？」

いまいち空氣の詠めない探に「キッドの事よ」と一括する。

「まあ、確かに意外でしたよね……僕たちがバラしちゃおうとスタン
ぱつてたんですがね」

「無駄だつたみたいね。」

痛い痛いと連呼し続ける快斗に向かつて、紅子は言つ。

「黒羽くん、少しは私にも感謝しなさいよ……貴方の傷口塞いで上げ
たのは私なんだから」

「へーへー、ありがとうございます。紅子様。」

「つたへ…」

そつ抜きながらも…

「…無事でよかったです… とてもこいつよつな顔ですね」

「…つるをこわよ、白馬君へ」

心を落ち着かせた。

「残のカミングアウトは、コナン君だけですね。じつあるんでしょ
う」

「愚問よ白馬君。気長に待ちましょいっへ。」

「快斗、コナンの新刊読む?」

「読む…いつもサンキュー…」

このよつじ、怪盗キッドは、上藤新一の正体を知つたといふ…

「なんてね。」

そつ抜き、にやつと快斗は笑つた。

「…え？」

と袁は聞か返した。

ある日の阿笠邸

「じゅかりのあ…」

博士は、のんびりとした声で状況を説明した。

・・・・・

「え…ジョディ、いまなんて…？」

「強制帰国よ…これ以上調べるなの一言で…」

それは突然の事で…

大統領からの令…逆らひつけとは出来なかつた。

「何でいきなり…？」

「さあ…よく分からないわ…」

「つて言つか…！」

ジョディ^モ。

渚はスプーンを加えたまま
荷造りをするジョディに言つた。

「俺どうなるの…! パスポートないし…ココから離れる気だつてない
のに…！」

「それは…」

ジョディは微笑みながら…

言った。

「阿笠博士の所へ行くのよ。話はつこいくるから?」

・・・・・

「住むって……？」

「そうじゅよ」

「そうじゅよみてーあいつは……」

過去に……それなりの関係であり……

そのことはジョディは知らない。

私が幼児化したのは知らないのだから……しかし博士は……

「ほほ毎日顔合わせておるんだし、大丈夫じゅう？」

能天氣に

「半日が一日に変わるだけなんじゅからのお

そう放った。

同居生活始まりです。
FBIは帰国しました。

file . 69 紅(前書き)

「アルコールが好きだねえ b y 林原」

哀ちゃんがお酒を飲まないのはあり得ないと思っています。

「……」
「……」
「……」

無言。

「渚をよみじくね、哀ちゃん」

ジョディはやつれて微笑んだ。

・・・・・

「へえ、大変だな」

阿笠邸にやつてきたコナンは言った。

「思つたより…險悪でな…」
「ずっとああの?」

博士、コナンの視線の先には
無言でテレビを見る渚と、コーヒーを啜りながら資料を見る哀。

「なんか、言ってくれんかの？」

「厭」

「そこを何とか…」

「怖えよ。」

やつコナンがいつと、博士は重いため息とともに肩を落とした。

「…まあ…もともとの相性とかはいい様な氣もするし…」

自信はないが

「なるようになるんじゃねえの…?」

自信無さげだが、はつきりと言った。

file . 69 紅（後書き）

…ひき逃げ事件

無意識に組み込んでしまった。うな自分が怖い。

心理学なんかハマらなければよかつた。

感想、評価等々お待ちしております。

しばらく見てなかつたのにな……

飛び起きた……といった感じではない。

「落ち着け……」

優しく自分に言い聞かせ、
情けなく震える『』の方を優しく抱きしめる。

「大丈夫だ……大丈夫」

深夜零時

それが彼……の目覚めた時刻であった。

高鳴る動機を落ち着かせ、また自分の先程まで寝ていたソファへと
身を沈めた。

ベットではなかなか寝付けないという理由で、ソファと毛布を借りり、
そこで彼は寝ていた。

そんなのは只の後付で、急な話だったため、自分の寝床は自分で確
保しろと言つた状態。

それだけなら別にどうつてことはないのだが

『哀ちゃんと一緒に寝ればいいじゃない』

ジヨーティはそう言ひうとしたのを全力で黙らせた。

気が引ける

それに、彼女も嫌がるであらう。

背中にぐつしょりと染みる冷や汗

脅えて、瞳を閉じる事を何故か自分が許さなかつた。

悪夢

彼女シホと再会を果たし、どこか安心したのか
過去、頻繁に見た悪夢を見る事はなくなつていた。

幼い頃の、掠れた記憶

消してそれは淡く、優しくない。

まずは雑音ノイズ。それが彼の聴覚の大半を支配する。
広がる紅と黒の屍　歪んだ口元　むせ返るようなきつい香水と、化
粧品の香り

血の匂い

もがく、哀れな肢体

それと…泣き顔

それぞれがフラッシュバックし、最後に

逃ゲル事ハ許サナイ

そう白く浮かび上がり、目覚める。

何故…また…？

また鼓動が高鳴り始める

何だか…

嫌ナ予感ガスル

気の所為であつて欲しいけれど。

file.71 安堵（前書き）

誤字、脱字があると報告を受けてました。

見つけましたら、報告願います。

「何話のどいら辻へ……」など、「協力よろしくお願いいたします。

眠れない

そんな自分に

「喉が渴いた」

自分以外起きているはずないのに、そう言った。

* * * * *

扉を開け、リビングに入る。

勿論。そこでは彼：ユエがソファの上で静かに寝息を立てていた。

そつと、小さくなつた背中を見て…ふと、笑みがこぼれた。

静かに歩み寄り、ずり落ちている毛布を掛けてやううと手を伸ばした

「シホ…？」

毛布に触れた時、背中から彼の声が通る。

一つ、息を吐いた後「起きてたの」と叫びた。

そして、手をすつと引き寄せた時
優しく、右手を掴まれた。

「何？」

そう問い合わせると、柔らかな声で

「本気で嫌われたのかと思つてたけど… そう言つわけじゃないみた
いだね」

意外だった。

確かにまた、同じ屋根の下で暮らすことは気が向かなかつたが
話しかけても来ないし…だからただ、黙つていただけで…

そう…思ったんだ。

「バカみたい」

そう咳き、声を上げて笑った。自分でも驚くくらいの笑顔で。

「笑うなよ」

と、不満げにユウは「ひらり」と向きなおし、言った。
私は、そのまま床に腰掛ける。

それは、

もひつひつと話していたい。と言つ私が、自然に動いていたのだ。

「やつぱ…お前といふと落ち着く」

「え?」

「なんか…安心すんだよ。何でだ?」

そう言つて、私の手を握りしめたユウ。

私も同じよ

そり、心の中で答えた。

一人でいるときよりも、自分でいられる。

笑つたり、怒つたり…

素直になれる

「せつしき怖い夢見てた」

そう言つた彼を、小馬鹿にするよりこ「どんな?」と私は問う。

「博士が巨大化する夢」

「なによ、それ」

「笑うなって、マジで怖かつたんだから」

「あはははははっ」

手を握られたまま、笑う。

「お前は見てないから分かんねえンだよ」

「分かるわけないじゃない。」

私にはデフォルメされた博士が暴れてる所しか想像できないもの「するなよ、デフォルメに」

また、笑つてしまつ。

「笑いすぎだつ」とユエは言つたが、

そんな夢を見ましたとわざわざ報告するユエが可笑しくて、仕方が

ない。

しばらく笑つてこむと、我慢を切りした彼が

「あー…………むづづく……」

そう、私の笑いをシャウトする。

「お前の所為で、俺バカみたいになつてきた。もつ寝る」

そう、我慢を盡つた供のよつと盡つた。

「……やつ、おやすみ」と私は盡つが

「手を離してよ」

以前として手は握られたままで

「やつまうつとためりつと布えんだよ……だから、」

「やつとためりつと布えんだよ……だから、」

「俺が寝付く……やつて醒めてよ」

甘えぬよつと、しかしあつけなく盡つた。

それもまた可笑しくて、小さく、くすくすと笑つた後

「仕方ないわね」

そう…微笑んで。

翌朝、気が付いたらそのまま寝てしまっていた。

file · 71 安堵（後書き）

感想、評価等々お待ちしております。

そして多分もうやうそひ終わつとうです。

「朝までお手手つないでねえ～」

「お手つーー？」

赤面する哀

「博士から聞いたぜえー？」

「やにやと笑いながら愛をからかい始めるコナン。
我慢しきれなくなつた哀は

「いだつーーー！」

思いつめつコナンの頭をひつぱたき

「五月蠅いわよーーー！」

「やつ言えば、渚君。今日お休みなの？」

歩美は問う

「アイツは昨日から博士ん居候に住んでんだよ」

「えー何ですかそれ！……初耳なんですけどおおおおおー！」

コナンの答えに、光彦は言った。

「何で黙つてたんですか灰原さん！なんか変な事とかされてないですかねえ！！」

光彦は哀に言ひ。

哀はよく分からなくて田を瞬かせ、そして笑みがこぼれた。

「何も……？大丈夫よ」

くすくすと微笑む哀の横で「添い寝の件はスルーか」と呟いていた。

が

「厨二臭いこと言つて起きないと」ねたからおいてきたのよ。」

「……え？ちゅうつ……？」

光彦は何を言つているのが理解できず（歩美と元太もだが）首をかしげていた。

「気が向いたら来るんじゃない？」

哀のそつけない答に

「やつ言つてきた試あつたか…？アイツ…」

「ナンが質問をぶつけたが、誰も答える事はなかつた…が…

「ナン君に恨みがあるわけではありますん！」

（新一はあるけど）

だから

ウチの新一君は常にこんな扱いです。

完結設定 まだ続きます。

ゆるりとした口差しが照りつける

少し肌寒い冬の空……お天道様はもう真上にある。

「おはよお

ソファから、寝なおすと窓のベットを借りて就寝していた渚。

「もうおはよの時間じゃないぞ、渚君」

「んー」

長い黒髪を振り払いながら、眠気眼を擦る。

「学校に行きなさい。まだ給食には間に合ひかかるのさ

博士ののんびりとした声が「学校」と発したところだ……

「おやすみ
「渚君」

部屋へ戻りつとした渚をとつ捕まえ、博士は言つた。

「ジヨーディ先生に頼まれたんじやよ、渚君を学校に連れて行けって

「ジョディが！？」

「何でそつ学校に行きたがらないんじや……」

渚は、特にこれといった理由がなく、ただ眠いからと言つだけなのだが

「俺ね～…昔学校でいじめられたことがあつて…それ以来怖くってさ…

子の紅い田で散々からかわれたし…」

そう渚が言つたところで、「わつか」と博士は頷くが

「君の情報は大体哀君から聞いとるんじや…学校に行つた事はなかつたらしいが…？」

「ギクッ」

「哀君は怒ると怖いんじやがのぉ…」

「あー…えー…っと…」

言い訳を模索していた所で…

R R R R R R R

タイミングよく携帯が鳴り

「あ、電話だから、博士」

『…コヒ?』

「でなきもなかつた

そりげなくそつ放ち、助かつたと眩いでから通話ボタンを押したが

相手は… その…

『なんですか？』
「いや、何？志保」

宮野志保…いや、灰原哀であった。

『学校来なさい』
「何？突然」
『あんたがいないと決まらないことがあるのよ』
「え？」
『だから来て…』

吐き出さように、志保は言った。

ふーんと答えながら、渚はいたずらに微笑み、呟つ。

「じゃ、お願ひって言つてよ」

『は？』

「したら行つてあげるから」

奥の方から舌打ちが聞こえ、

『お願い。』

可愛く、ため息に交じりに書つのかな?とか期待した皆様ごめんな
さい

さうじと、棒読みで言われてしまいました。

* * * * *

「はあ~

ため息が空に消える。

行くと言つたからには仕方なく、行く。

「もうヤダなあ~

そう咳きながら、車が掠れるよつに過ぎてこへ横断歩道を見据えた。

「ロゼ様」

背後から、低い声音が背中をなぞるよう

「アーネームを呼んだ。

「お前が……」

黒服に身を包んだ男性が、紳士的に頭を下げ

「今日はお話をあつてもました」

やつ、言い放った……

file · 73

黒服の男（後書き）

長くてすみませんです。

「 ハハ……」

帰るなり、哀はその名を呼んだ。

階段を駆け下り、地下へ行く

「何で来なかつたの！？」

勢いよくドアを開けると、珍しく机に向かい、しかし俯いていてこちらを見ようとした。しなかつた。

地下の……冷たい空氣。

何故か、哀は押し黙つた。

ふと、渚が泣いていたような、そんな気がしたのだ。

「 …『メンね、シホ。行かなくて・・・・・』

ハの口から、謝罪の言葉が告げられる。

「 急に用事が入っちゃって……あ、言い訳だよね。これ。」

ただ、何も言えないままじっと哀しむつ一度、

「『メンナサイ』」

謝罪の言葉を告げた。

哀は俯き、

「 もう、ここだ。もう、『メン』。」

やがて、推し堪えた何かを吐き出すよつと呟つた。

「悪かったわ」

やつとつて、重い扉のドアノブを、勢いよく回した。

file · 74

約束（後書き）

短くて済みません

運命

それは誰にも… 变える事が出来ない…

どんな天才たちが口々に言ひ争つても、答えは…ひとつ

迷い、選んだ道を進んでも

それはもともと決まっていたようなもので…

後悔さえも、しても無駄だ

振り向くことは出来るけど…

……歩み直すこととは出来ない

* * * *

真夜中

「ど」「行くの？」

大人びた声が、この耳を突き抜けた。

「あ…シホ…」

「こんな真夜中にお出かけとは…貴方、」

ため息交じりに続けられる。

「自分の立場が分かつていてるの？」

そう、言つたところで「何事じゃ？」と博士が起きだした。

「人が死んだんだよ…」

「え？」

「俺の友人だ」

「ユエ！？」

大人しい少女が、声を荒げた。

「貴方、死にたいの！？」

その友人って組織の関係者でしょう？そんな状態で言って、なんになるの！」

一つ息を置き

「ただ…」

囁くよつと言つた。

「死ぬだけよ」

そんなの分かっている。

「でも御通夜だから、いかねえと

「何度も言わせないで、あ…

「死んだつていい！…！」

言葉を遮つた。

「俺の恩人なんだよ。この言葉も、知識も…あの爺さんがくれたんだよ…」

頬を、生温かい霧が伝づ

「まだ言つてねえんだよ、何も一言えてねえんだよ…！だからせめて…！」

「ユハ

思わず、捕まれた手を、振り払つてしまつ。

「あ…」

彼女は哀しそうに俯き「ちょっと待つて」と言った。
数分後、彼女から一つ、カプセルを渡された。

「解毒剤よ。」

「そんなの分かるよ、飲んで出れば俺の正体はばれねえかもしねえもんな」

「そうよ。」

「俺になんか使うんなら、新一にやれよー。」

「それは工藤君には弱すぎで聞かないと思ひの

そつと「だかりよ、」そつ頷いた。

「…あ…シホ…」
「なに…？」

のばやうとした腕を、押さえつけようつに自分の頭へともつてきたり

「行つてくる」

彼は夜道を駆け出した。

* * * *

まつだぐみくみちょう
松田組組長

まつだ
松田 仁

享年八十八 急性くも膜下出血により死亡

「情に厚く 酒と女が好きで、今期は逃したが

天涯孤独であつた若頭を、養子に迎えていたおかげで…」

「世継ぎ入るんだ… 残念。組織の人間でも贈ろうと思つていたのに

ウチ

な…」

「でも、よくロゼが出入りしてこたそつよ」

「そんなの関係ないね。」

「自分の息子なのに?」

「ああ、アイツには嫌われてるから」

その言葉に、微笑する。

「葬式には行けないのか? ベルモット…」

その問いに

「当たり前じゃない。裏切り者の上口じじいなんかに…」

"I do not put up an incense stand

even if I die"

(たとえ私が死んでも、線香なんかあげてやるものですか)

「ねえ、爺ちゃん」

「ん?」

「何でベルモットは俺を置いていったのか?」

「仕事があるからだよ」

「ねえ爺ちゃん」

「今度はなんだ?」

「俺、迷惑じゃない?」

優しさに飢えていた、孤独な幼心には

「そんな訳無い。」

そう言って、クシャリと笑った爺さんの笑顔、

温かく大きな手は
酷く…心にしみた。

「眠つてるみたいだる、」

「ああ…ホント」

田を細めて、爺さんの死に顔を見る。
つい、昨日の事だ。

登校中、俺を呼びとめたのは「マイシ」…

爺さんの養子でもある若頭、松田マシダ 行コキ

ホンの昨夜の事だつたらしく、

「あつとこつ間だつた。ホント」

行は、そう漏りす。

もう、俺が行つた時は意識がなくて…
細い管が、いくつもつながれていた。

病院嫌いの爺さんは、どんな怪我をしても…大病を患つても自宅療養。

「最後まで頑固な爺さんだな。線香がい言つたのも、爺さんだろ」「ああ、おかげで匂いがきつくてよお…」「鼻曲がりそうだよな」

身内だけの通夜。

告別式とかいろいろこりやむたうだが、やはり俺は追われる身…
へタに歩き回れない。

「そんじゅ 」の邊で、「
「おう、氣ヒ付けるよ。」

行は、寂しそうに微笑み、俺の背中を押す。
俺のガキの頃を知る、唯一の若者だ。

「生きてたら、また線香をあげに来てやさよ」

ゆづくつと、

広い部屋を出る。

縁側に座つて、話していた事を想い出す。

迷惑なんかじゃねえ、いつそなりひがの子になるか？

「爺さん」

お前見てえないい子、ケツの穴に入れても痛くねえンだぞ

「ありがとう」

最後に

「...マックス...」

ケツの穴じゃなくて、鼻の穴だよな…

受けを狙つたのか？爺さん…

謎が多い、松田の爺さん。

「J冥福をお祈りいたします。」

「わかつてゐよ、幼馴染」FAST鏡音レン
かわいあらわな曲。

「正解だよ名探偵」
の辺りの後のお話です。。

「逢いに来たつて……？」

…また…惑わされる。

「聞いてたの…？」

「ええ…話してほしーの」

捕らわれていることに気づかない。

「貴方がどうして…」

気づかない…

「私の元を去ったのか…」

いいえ、

気が付かないふりをしているの。

* *

「遅いな… アイツ」

暖炉の熱を浴びながら、うたたねこいていた日の事。
寒い日で… たぶん、志保は買い物だろう。

「迎えにでも行こうかな…」

「あーでも道わからんねえや

独り言

自問自答を繰り返す。

そして数分後

カチヤ

悪魔が足を…踏み入れた。

おかえり、シホ

悪魔は、そんな事をえこいつのを許もなかつた。

「…なぜ俺が、わざわざいこんな所こいるのか…分かるか?」

「ジン…」

彼の呼び名を口の中でつぶやく。

「見当たらぬと思つたら…こんなとつじで油を売つっていたのか
「女のところを転々としてゐのせつもの事だらつ…」

冷ややかな眼光と共に、小刀がこちらを向いた。

「ふざけるな、相手が悪い。」

「おつかねえな、お前」

寒さが増した。

「そうだよな、あんたのお気に入りだったな。あいつ

一人でペラペラとしゃべり続ける。

「仕返し見てえなもんかな、俺の家もアンタが燃やしたしだもこいつは関係ないよ、俺が勝手に転がり込んでるだけで……」

無駄な命乞いだ

「関係な

「黙れ」

どすの利いた低い声が、響く

「あの方直々の命令だ。」

見下ろす瞳が鋭くて、

俺の体は恐怖に溺れる。

「もうから退け…お前ら一人は処刑だ」

そして、己の体が、真一文字に傷つけられていたことを知る。

「つあ…」

目の前が、白く円にかすむ。

「処刑つて…アイツは…！」

状況を飲み込むのに、いささか時間がかった。

片膝をついたところで、
血が滲み、溢れだす。

「来い」

その一言と共に、俺はその場を去ったのだ。

「お前を守つたつもりだった

俺が傷つけば、それでいい。

お前は無事でござれるだらう。

でもせかつた。

お前を傷つけたのは
…

「 アイツを傷つけたのは俺なんだよ」

「 アイツを黒く染めたのは……俺だ……」

处罚！？

「パフェマヨリヨシカ」スゲー笑える。

突然の場面展開いいいいいいいいいいいいいい

久しぶりに会った彼女は…

酷く…荒んで見えた。

変わったのは…

環境のおかげだろうか…

そう、思いたい。

人を信じれなくなつた彼女は…もう見たくない。

「懐かしい」

「おはよう。シホ」

早朝。

「おはよう。…早いのね…何かあつた?」

「気分だよ。ただの」

椅子に座ると、砂糖だけは言つた「コーヒー」が出てくる。

そして、朝食のいい匂いが鼻をくすぐる。

漏らすまいとつぶやいた。

「昔みたいだろ。懐かしい？」

「ええ。」

私の返答に微笑むユエが、そっと、昨夜の夢の続きの様で。

それが、真実であったのならば

あの時の私は……ヒトになっていたのだろうか……

「ねえユエ」

「何」

そう言ったといひで言葉を紡ぐ。

私の元を去了たわけ……

真実なのよね……

file · 79

曇天（後書き）

あたまがおか
s

「救いたい……？」

いや、違う…

「手に入れたい…」

そんなくだらぬすぎる欲望が、お前を何度も傷つけている。

六

「ばいばい！ 哀ちゃん」

「じゃーなー」

「また明日」

いつもの下校途中。

全ての歯車が動き出した。

「え…っ」

目の前に、黒い車が止まり
恐怖が、突き刺さる。

ドクン…っ

と胸が鳴り

強い気配を感じるが、身体が動かない。

そして…

「むぐっ…」

透き通るような香りが鼻孔を塞ぎ…
氣を失った。

「大事な客人を招くための…人質エサなのだから…？」

黒髪の長身の男が微笑む。

「ボス。 こちら…どうします?」

「乗せる。 しかし丁重にな」

“どうやら正体は気づかれていたようだ…

あれ…なぜ？

灰原哀が帰つてこない事。

それは皆を騒がせていた。

「哀君が帰つてこないなんて！…」

「落ち着け博士。」

DBバッヂのセンサーは、灰原の分は反応がない。
博士の家にもないらしくこれは壊されたという事…

「博士…渚は…？」

「え…」

「アイツはどうに行つたんだ！？」

こんな事態なら一番に走り回りそうなアイツが、不在。

「昼から…出かけていて…電話は置いてつたよつて連絡が取れんの
じゃ」

「バッヂは、まだ出来てなかつたのか」

「スマン。新…！」

必死で謝る博士。

「クソッ！…！」

無意味に動き回れない。

それは俺の本能が組織をちらつかせるからで……

「こんな時に……アイツはどうに行つたんだ！……」

消え入りそうな声とともに、俺は頭を抱えた。

正直……お手上げに近かつたんだ

警察は……？

言え、それは組織が係わっていたら逆に……なので。

さて、あの放蕩息子はどうへ……？

実はあの人と言つ所に居るのです。W

file · 82 肉親（前書き）

ナギーの肉親は、組織のボスだけ…

正直微妙な話ですねw

「あー やつべ。もう真っ暗、ジヤン」

「おい、イントネーションが可笑しくねえか？酒飲んでねえくせに」

「香水に酔つたんダヨ」

「お前が連れてきたんだろ？女の子たちは」

夜の繁華街に また？
二つの影。

犯人は 小五郎と 渚。

友人と飲みに来た小五郎と、女の子を連れてやつてきた渚。
何故連れが女性かというと……なんか誘われたんだとか……

そしてどんな騒ぎした結果、これだ。

怒るだらうなー志保…

携帯（おつちやんの）の時刻を見ながら苦笑いを浮かべる。

「え？ 行方不明！？」

小五郎が突然、声を上げた。

「博士のところのガキが！？」

「おひちゃん！電話借して……」

小五郎から電話を奪い取ると、相手は蘭で、

『渚君……？』

「どうして？」と、なんであいつが！？』

分からぬのよ……と不安そうな声を蘭は発した。

「コナンは……？アイツは……」

しかし……言葉をつづけなかつた。

「どうした？お前……」

小五郎は口を開けた。

渚は電話を切ると、小五郎のズボンを掴む。

思わず、田の前に立つ男と、小五郎のズボンを見比べた。

「おめえ……！」こつは……」

顔はあまり似てないのだが……雰囲気が良く似ていて……

「俺の……」

黒塗りの車が数台。

黒服の、町の雰囲気には不似合いなスース姿の男を筆頭に
数人の黒服の男が拳銃を構え、一人を囲む。

者は吐き出すよう…眉を歪ませ、言った。

「実の父親だよ」

次話。Gの秘密と…

組織の正体が明かされる…！

「ロゼ」

男がそう発した途端。
ユヒの肩が震えた。

「何の用だ…」

必死に冷静を保とうとするのが見てうかがえる。
小五郎は困惑していた。ただものじやない雰囲氣と。

目の前に立つ男…

それは大手会社の社長…

「ロゼ」「とはワインの事…

「志保アイツをどこにやった!」

「アイツとは…」

男は考える様子を見せた後、

「ショリーの事かい?」

また酒の名前…？

男は、よく新聞などもこぎわせる、社長
若さで会社を持ち上げ、しかし裏社会とのつながりを囁かれる。

それがこれか？

「あの子なら、眠っているよ…まだね。」

静かな微笑みと共に言った

「組織の裏切り。裏切り者は抹殺されるんだったよね。
あの子はどうなるかな。始末は全て「ジン」に頼もうと思つている
んだが…」

パン

乾いた音と、
苦痛に歪む顔
滴る鮮血

「渚！…」

もう、理解不能だった。

今、ジンと書ひ言葉が男の口から飛び出したのと共に、
渚ハセが動き出した。

そして、銃で撃たれた。

「ありがとい
？？」

礼を一つすると、小五郎を見据え、言った。

「元…刑事さんなんですってね。眠りの小五郎さん」
「…それがなんだ」

驚きはしたが、そつけなく答えた。

渚あの掌の傷口を止血するため、ハンカチを当てる

「そんな”殺人鬼”を助けちゃうんですか？」

「…え？」

今何と言つた？

「やめろ…やめてくれ……」

必死に叫ぶ渚の声は無意味

「世界的指名手配犯「記憶泥棒」は、彼なんですよ」

「違う…おっちゃん！！！違う……！」

「偽りの姿を借り、平然と過ぎ去してこようだけど…」

「おひちゃん！俺は……！」

男は、間髪入れず

「自分の息子」を蹴りあげた。

「また嘘を吐くのかい？口ぜ……その緋色の瞳が、何よりの証拠だろ
う……？」

傷ついた、渚の顔を見て、啞然とした

月明かりに、照らされた瞳が片方。緋色に染まっている。

「つ……」

袖で、顔を隠すようにおおむね。

「カラコンと言つもので隠していたようだね。バカな奴。

それはお前の誇りだと何度も言えばわかる

「誇りなわけあるか！！！」

「お前は身も心も深紅に染まる……」

「やめろ……」

「お前は……犯罪者なんだよ……」

弄ぶ様に、くすぐすと

蹲る渚を見据え声を上げて笑い出した。

狂つてゐる

「あははっ…そうだ。忘れるといひだつた…」

笑いを止め、告げる。

「本題だよ。また俺をバカにするムカつく奴がいるんだ
「俺はもう”殺シ”はしない」
「協力してくれないなら、シェリーの命はないよ
「…」

やつてていることが子供だ

自分の私欲で、殺人を指示し…

命令を聞かないなら大事なものを奪う…

「只、お前が組織に復帰をすれば…あの子は見逃してあげるよ…」

世間を知らない、ただの我儘な子供のように…

「それは本當だな。俺がお前の命令を聞けば、志保には手を出さないんだな！？」

「そうだよ。簡単だろ？？」

「渚！？」

ゆっくりと立ち上がる、彼の背中に声をかける。

静かに振り向く横顔が、大人びて見え、

「名探偵に伝えて…」

「は…？」

「ゲーム…」

静かに微笑み

「game over」

(ゲームはもう終わりだ)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7271u/>

願わくば、私の傍に…

2011年11月17日20時48分発行